

「新しい人」

歌垣教会 加藤 清



ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

Ⅱコリント5・17

教育や子育てにかかわる方は、育てている相手に対して言っているわけではない言葉を知っていると思います。普通、自信を失わせ劣等感を強めるような言葉は、口にしません。

ところが、人には言わないであろう言葉を自分には言っていることがあるのではないでしょう。か。「私は足りない」、「私は罪深い」、「私は愚かだ」、「私は不十分だ」、「私は弱い」、「私は貧しい」、「私は古い人のままで」等々。それは、実体験がもしもありませんが、その言葉と思いが自分自身を貶め不自由になっています。

一方で聖書は、断言しています。私たちは、古いものが過ぎ去りすべてが新しくなった人である

あると。私たちは、新しい創造物です。

新しい人がどのような人かは、自分の経験からではなく聖書から知ることができます。自分の経験していることと聖書に記されていることが違っている場合は、聖書にあることをその通り受け取りましょう。自分の経験や現状より聖書を優先することは、信仰です(Ⅱコリント5・7)。言葉と想いには、力があります(マルコ11・22〜24)。「私は罪人だ」ではなく「私は義人だ」と言いましょ。」「私は貧しい」ではなく「私は豊かだ」と言いましょ。」「私は弱い」ではなく「私は強い」と言いましょ。」「私は愚かだ」ではなく「私は賢い」と言いましょ。」「まだ死んでいない」ではなく「古い私は死んだ」と言いましょ。どれも聖書的でキリストにある真理です。真理は、私たちを自由にします。新しく創造された皆さんが、み言葉を受け取りキリストの現れとなりますように。

※聖書箇所 義人…ローマ5・1、Ⅰコリント6・11等。豊か…Ⅱコリント8・9、Ⅰテモテ6・17等。強い…エペソ1・19、コロサイ1・29等。賢い…ヨハネ16・13、エペソ1・17等。死…コロサイ3・1〜3等。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座「旧約聖書丸ごと早わかり(2)」	4
神の国 ▲ 1 / 2 ～ 1 / 23 ▼	15
キリストの十字架への道 ▲ 1 / 30 ～ 3 / 27 ▼	39
牧羊ひろば (岡谷教会)	93
「牧羊者」のご購読・ご利用について	98
おわりに	98

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシヤ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」(以上、日本キリスト教
団出版局)、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」(日本ホーリネス教団出
版局)、イン：「教会学校さんびか」(インマヌエル教会学校部)、ふ：「ふくいん子
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」(以
上、日本児童福音伝道協会)、PW：「ブレイズワールド」(リビングブレイズ)

救い主と出会う

ルカ 19:10

● 神の国

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
1月2日 新年	イスラエルを治める者	ミカ 5:2～5	同2節
9日	神の国は近づいた	マルコ 1:14～15	同15節
16日	神の国は私たちにただ中に	ルカ 17:20～21	同21節
23日	神の国の完成	黙示録 21:22～22:5	同23節

● キリストの十字架への道

1月30日	十字架を負って従う	ルカ 9:21～27	同23節
2月6日	変貌のキリスト	ルカ 9:28～36	同35節
13日	熱心に求める	ルカ 11:1～13	同9節
20日	金持ちとラザロ	ルカ 16:19～31	同29節
27日	いやされた十人の病人	ルカ 17:11～19	同15、16節
3月6日	主がお入り用なのです	ルカ 19:28～40	同34節
13日	レプタ2枚をささげたやもめ	ルカ 21:1～4	同3節
20日	キリストのまなざし	ルカ 22:54、31	同61節
27日	身代わりの十字架	ルカ 23:13～25	同21節

旧約聖書丸ごと早わかり(2)

鎌野 直人



はじめて

旧約聖書は四つの部分、五書(創世記から申命記)、歴史書(ヨシユア記からエステル記)、詩歌(ヨブ記から雅歌)、預言書(イザヤ書からマラキ書)に分けられます。今回は、歴史書のヨシユア記から列王記の部分を概観してみましよう。

I ヨシユア記

(内容)

モーセの死(1・1)から始まり、ヨシユアの死をもって終わっている(24・29)ヨシユア記は、イスラエルによるカナン征服を叙述しています。主の言葉に従って律法を守る者たち

に勝利が与えられ、彼らの上に主の約束が現実となること
その中心メッセージです(1・7)。

(分解)

1 約束の地の征服(1~12章)

本書の冒頭で、主はイスラエルの指導者になったヌンの子ヨシユアに「勇気を持って主の律法に従え、そうすれば勝利を得ることができる」と語られました。それは、モーセの存在よりも大切なのは、共に進まれる主への従順だったからです。そこで、イスラエルは主の言葉に従い、主の臨在をあらわす契約の箱を先頭にヨルダン川を渡り、さらに戦いの直前には割礼を行い、過越を守りました。主の言葉どおりにエリコの城壁の回りを行進した民は、その町を完全に滅ぼし尽く

することができました。

ところが、アカンが主の言葉に従わなかったために、民はアイの町を滅ぼすことはできません。そこで、民は主の言葉に従うことを確認した上でアイを再攻撃し、それを陥落させました。この勝利のうわさを聞いたギブオンに住人は戦うことを放棄し、イスラエルに降伏しました。さらにイスラエルは、南方の町(のちのユダ)の王たちに勝利し、北方の王たちをも滅ぼし尽くしたのです。

2 約束の地の分配(13～21章)

老齢のヨシユアはイスラエルの12部族それぞれに土地を分配しました。マナセの半部族、ルベン族、ガド族はすでにモーセからヨルダン川の東の地を分配されていましたから、ユダ族、エフライム族、マナセの半部族に土地が与えられ、残りの7部族には、くじによって土地が割り当てられました。なお、この時に分配されたのは、すでに獲得した土地だけではありません。これからも獲得すべき土地も含まれていました。約束の地を獲得する戦いはまだ終わってはいません。

3 将来への警告(22～24章)

最後に、勝利を続けてきたイスラエルに対して、主に従い続けなければ必ず敗北が訪れることをヨシユアは警告しました。そして、主を捨てた時に襲いかかる悲劇を彼は民に伝え、主の律法への従順を民に誓わせて、ヨシユア記は幕を閉じます。

II 士師記

(内容)

ヨシユアの死から始まり、サムエルの誕生の直前までを士師記は描いています。主の言葉に従った勝利の記録をヨシユア記とすれば、主の言葉に従わなかったために味わった敗北の記録が士師記です。士師記に描かれているイスラエルの姿には一つのパターンがあります。まずイスラエルが主を捨てて他の神々に仕えること、それゆえに主の怒りが燃え、敵の手にイスラエルが渡されること、イスラエルが主に呼ばれること、主がさばきづかさを起こされてイスラエルを救われること、敵はイスラエルの手に服し、平安が国に訪れること、そして再度イスラエルが他の神々に仕えること。このパターンに表されている民の背教と主のあわれみが士師たちの活躍の

記録で繰り返されています(2・11～13参照)。

(分解)

1 未征服の地(1・1～2・5)

ヨシユアは死にましたが、約束の地全てをイスラエルが征服した訳ではありません。そこで、民は継続してカナンに住民たちと戦いました。しかし、残念ながら彼らを追い出すことができません。その結果、カナンの地の住民たちをその地から完全に追い払うことはしない、と主も宣言されます。

2 士師たち(2・6～12・15)

残念ながら、残されたカナンの地の住民たちはイスラエルの罨なまとなりました。そして、民は背教による圧制と悔い改めと従順による回復の歴史を繰り返すこととなります。

戦闘の指導者としてイスラエルを救いに導いた5組のさばきつかさの姿がここには詳しく描かれています。クシヤン・リシユアタイムの手から救い出したオテニエル、モアブの王を暗殺した左利きのエフデ、カナン王ヤビンと戦った女預言者デボラとアビノアブの子バラク、ミディアンの手からイスラエルを解放したギデオンとその子アビメレク、そしてアン

モン人と戦った勇士エフタです。この他に、さばきつかさとして5人の名が挙げられています。

士師記に登場するさばきつかさたちは、決して立派な人格をもっていたわけではありません。女預言者デボラが共に行くことを切に求めたバラク、なかなか主の招きに応えられなかっただけではなく、人を恐れて夜中にしかバアルの祭壇を撃ち壊せなかったギデオン、父が断った王となるとい誘惑に打ち勝てなかったアビメレク、民の間で不一致を生み出し、主への誓願のゆえに自分の娘を燔祭はんさいとしてささげたエフタ。しかし、主はこれらの人々を用いて、主の救いを実現されました。主のふところの深さを見ることができません。

3 サムソン(13～16章)

さばきつかさのなかで一番詳細に描かれているのがサムソンです。その両親の信仰の姿は、彼の誕生にまつわる出来事の中に顕著です。しかし、サムソン自身は決して模範的なイスラエルの民ではありませんでした。個人的な復讐ふくぼうに基づいた略奪と放火を繰り返し、遊女のところに通い、ペリシテの女デリラの策略に乗って自らの秘密を教えました。ですから、むしろ、サムソンの記事は、イスラエルがどれだけ社

会的に、倫理的に荒廃していたかを語っています。しかし、主はそんなサムソンの怪力を用いて、ペリシテ人の圧制からイスラエルを救われました。主のわざの不思議を覚えるばかりです。

4 王なき民の無秩序 (17～21章)

イスラエルの民の荒廃は本章でクライマックスに達します。偶像崇拜、強奪、旅人への配慮なき行動、強姦、殺人、そしてイスラエルの民の間の内紛によるベニヤミン族絶滅の危機。王がないために、民の間に無秩序が蔓延しました。主の言葉に聞き従わない民の経験した暗黒時代です。ヨシユアの死後、下り坂を転げ落ちた民は、落ちる所まで落ちてしまいました。

Ⅲ ルツ記

(内容)

「さばきつかさが治めていたころ」(1・1)、つまり士師記に描かれている時代を背景に、イスラエルの王ダビデの先祖に現された主のいつくしみがルツ記には描かれています。

異郷の地モアブで夫と二人の息子に先立たれたベツレヘム出身のナオミは、失望と苦しみの中に故郷へと帰ろうとしました。その時、彼女の息子の嫁であったモアブ人ルツは、「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です」(1・16)と告白して、ナオミと共にベツレヘムに戻りました。

大麦の収穫の時、その落ち穂を拾っていたルツは、偶然にもナオミの夫エリメレクの親戚であるボアズの畑に来ました。そこでルツはボアズから十分な大麦が与えられました。ルツとボアズのこの出会いは決して偶然ではありません。いつくしみに満ちた主の摂理的な巡り合わせでした。

主のみわざに気がついたナオミは、大麦の打ち場で寝ているボアズに求婚するようルツに命じました。ボアズがルツを妻とすることによって、失われる懸念のあるエリメレクの嗣業をあがなう道が開かれることを彼女が願っていたからです。ルツは、姑の言葉どおりに行いました。そして、ルツのナオミに対するいつくしみの姿を見たボアズは、彼女との結婚に同意しました。しかし、ボアズよりも近い親戚がいるため、まだすべての問題が解決した訳ではありません。

そこで、様々な裁きの場として定められていた町の門において、ボアズは親戚の人にエリメレクの土地をあがなうか、

と尋ねました。ルツもその土地と共にあがなう必要があることを知った親戚の人はそれを辞退し、ボアズが正式にエリメレクの嗣業とルツをあがなうことができるようになりました。そして、ボアズからダビデの祖父にあたるオベデが誕生したのです。

ルツ記は、エリメレクの一族に対する主のいつくしみとルツのナオミに対するいつくしみが出会った時に起こった奇跡の記録です。そして、主の摂理的なわざは、混乱の民に秩序をもたらす王の誕生に道を備え、異邦人にも広がる主のいつくしみをあざやかに現したのです。

IV サムエル記I、II

(内容)

最後のさばきつかさであるサムエルの誕生から始まり、イスラエル王国の王であるサウルとダビデの時代について描いているのがサムエル記です。王なき民に蔓延した混乱と外敵(特に海岸沿いに住むペリシテ人)の襲来から民を救い出すために、王制がイスラエルに敷かれ、国に秩序が回復されます。同時に、弊害も生まれてきました。

(分解)

1 サムエル (I 1~8章)

サムエル記は、士師記の終わりに描かれていた暗黒時代から始まります。王のいない国に秩序はなく、人々はほしいままでに生きていました。シロにある幕屋に仕える祭司エリの息子たちもそうでした。主へのささげものを自分たちの思うままに扱うことにより主を汚していたからです。主からの言葉さえもまれとなったこの時代、イスラエルはペリシテ人との戦いで敗北し、主の臨在をあらわす神の箱さえも奪われていました。

そのような中で、長く子どもが与えられずに苦しんでいたハンナに、主はサムエルを与えられました。彼こそがイスラエルに備えられた光です。主は、ナジル人として幼い頃から幕屋に仕えていたサムエルにエリ一家の没落を予告し、彼を主の預言者としてイスラエルに立てました。

成人したサムエルはイスラエルのさばきつかさとなりました。そして、彼の勧めに従って偶像を捨てたイスラエルは、宿敵ペリシテ人に勝利していきます。しかし、ペリシテ人からの侵攻は止まりません。そこで、戦闘における指導者となる王を立ててほしい、と民はサムエルに懇願しました。その

ような要求は主への重大な罪である、とサムエルは警告を与えますが、人々は彼の声に耳を傾けません。

2 サムエルとサウル (I 9 ～ 15章)

主はついに人々の要求を受け入れられました。主はサムエルを遣わし、ベニヤミン族のサウルをイスラエルの初代の王として立てるために任職の油を注がせました。このことは当初秘密とされていましたが、サムエルはイスラエルのすべての部族の前でくじを引き、民の前でサウルを王として任命しました。当初、民から王として受け入れられていなかったサウルでしたが、ヤベシユ・ギルアデをアンモンの手から救出することによって全イスラエルから王として認められました。ついにイスラエルに王制が始まったのです。

ところが、イスラエルは新しい時代を迎えるだろう、という期待をサウルは見事に裏切りました。主の言葉を心して守るべきであったのに、ペリシテ人と戦う民が離散することを恐れて、到着が遅れたサムエルに替わってサウルは主へ犠牲をささげてしまったからです。さらに、サウルが無謀な誓願を立てたため、主への信仰に堅く立って勇敢に戦いを進めていたヨナタンの命を危機にさらしました。そして、「アマレク

人のすべての持ち物を滅ぼせ」という主の命を軽視し、最もよいぶんどりものを残したことが最後のとどめとなりました。彼は主を恐れず、むしろ民を恐れたからです (15・24)。主はサウルを王としたことを悔い、別の王を立てられることを決意されました。

3 サウルとダビデ (I 16章 ～ 31章)

主が選ばれた次の王は、ベツレヘムに住むユダ族エッサイの末の子ダビデです。サムエルは彼の頭に油を注ぎ、ダビデには主の霊が留まるようになりました。その一方で、サウルから主の霊は離れ、むしろ悪霊が彼を悩ますようになりました。

ダビデはその音楽の才能、さらにはペリシテ人ゴリアテとの決闘における勝利を通して、サウルの王宮と深く関わるようになります。サウルの息子ヨナタン、娘ミカル、そしてイスラエルの民はダビデを愛し、主が彼と共にいることに気がついていました。しかし、ダビデの人気を嫌ったサウルは、幾度も彼を殺そうと試みますが、サウルの息子や娘の助けによってダビデはそこから救い出されます。

ダビデが台頭する一方で、サウルが王として不適任であることが一連の出来事でさらに明らかになされていきます。ダ

ダビデをかくまったという理由でサウルは祭司の一家を皆殺しにしました。さらに、主が彼の祈りに答えられないため、口寄せの女を用いて死んだサムエルを呼び起こしました。ついにギルボア山でのペリシテ人との戦いにおいて、サウルは敵によってひどく傷を負い、自害してしまいました。

ダビデは逃亡者として各地を転々としていましたが、様々な戦いにおいて勝利を獲得していきました。また、二度もサウルを撃つ機会があったにもかかわらず、ダビデはそれらの機会をういませんでした。それは「主が油注がれた王を撃つてはならない」との確信に彼が立っていたからです。

4 祝福の下にあるダビデ (II 1~10章)

サウルの死後、ダビデは主の言葉に従ってヘブロンへ上り、そこでユダの家の王として油注がれました。その一方で、サウルの子であるイシュ・ボシエテは、北の部族たちによってイスラエルの王として立てられます。しかし、ダビデとの戦いの中でイシュ・ボシエテの力は弱り、ついには彼の軍勢の長アブネルと共に暗殺されてしまいました。

ついに、ユダ族のみならずイスラエルのすべての部族がダビデを全イスラエルの王と認めるようになりました。即位

後、ダビデはエブス人が住んでいたエルサレムを取り、そこを都とし、ペリシテ人との戦いにおいて連戦連勝を経験しました。彼の王としての地位は堅くなり、主もまたダビデを祝福されました。ですから、神の箱を都エルサレムにかき上ることをきっかけに、預言者ナタンを通してダビデ王家の祝福を主は宣言されました。羊飼いであったダビデをイスラエルの王とした主が、その子孫に長く王の位を与えることを約束してくださったからです。

5 呪いの下にあるダビデ (II 11~14章)

順風満帆と思われていたダビデですが、あるひとつの事件をきっかけに彼の生涯は下降線をたどっていきます。ダビデは、ウリヤの妻バテ・シエバを奪い取り、姦淫かんいんの罪を犯し、王に対して忠実なウリヤを自らの権力を用いて殺しました。最大限の権力を持つ王が、その権威を乱用したのです。預言者ナタンはその罪を指摘し、ダビデも自らの罪を認めました。しかし、この罪から生み出された呪いは、ダビデ一族に暗い影を投げかけるのです。

一族を襲った悲劇は、ダビデの娘タマルを腹違いの兄アムノンが強姦したことから始まりました。タマルと同じ母をも

つ兄アブサロムは、妹の復讐としてアムノンを殺しました。さらに、アブサロムは謀^{はか}つてダビデに反旗を翻^{ひるがえ}し、自らが王となったことを宣言し、父をエルサレムから追いやったのです。しかし、アブサロムはヨアブによって殺され、この反乱に幕が下ろされます。幸運にも、国はダビデの手の中で修復されますが、ダビデは自らのまいた種を刈り取らなければなりませんでした。

サムエル記には人間のわざの限界が描かれています。サムエルは自分の子を律することができず、最初の王サウルは主に従いませんでした。ダビデでさえ、自らの権威を乱用して、自らの家族を含めた多くの人を傷つけていきました。しかし、そのような人さえも用いてイスラエルの王国を堅くされたのは、ダビデを選び、ダビデを多くの敵から救われた主です。人の思惑を超えてその御心を現実にされる「主は生きておられ」（Ⅱ22・47）ます。

V 列王記Ⅰ、Ⅱ

（内容）

ダビデの死から始まり、統一王国が分裂し、ついには滅亡

する歴史が列王記には綴^{つづ}られています。本書は「なぜ主が立てられた王国が滅亡したのか」という疑問に対する明確な答えを示すために書かれています。イスラエルはエジプトから救い出してくださった主の言葉に従わなかった、だから王国は滅亡したのです（Ⅱ17・7～10）。

（分解）

1 統一王国（Ⅰ1～11章）

ダビデ王が年老いた時、アドニヤは次の王を狙^{ねら}って画策しました。しかし、主の預言どおりソロモンが即位し、ダビデの死後、アドニヤを支持した人々は肅正されます。

即位当初、ソロモンは真心をもって主を愛していました。そこで、主は他に並ぶ者のない知恵を彼に与えたのみならず、驚くほどの富をも備えられました。さらに、父ダビデに主が約束されたように、ソロモンは主の神殿をエルサレムに建築し、そこに主の契約の箱を納めます。主はささげられた神殿にその栄光を満たし、主の名がそこに置かれている祈りと礼拝の場としてそれを受け入れられました。

そのような栄光の中で、ソロモンは諸国との交易を通して富を獲得しました。ところが、これが彼の罫^はとなったのです。

交易を円滑に進めるためにソロモンは外国人の妻を多く持つようになり、彼の心は主から他の神々へと転じていきます。その結果、ソロモンの死後にイスラエル王国を二つに裂くと主は宣言されますが、ダビデのためにその王家を残されるというあわれみをも示されました。

2 二つの王国（I 12章～II 17章）

①王国の分裂（I 12～16章）

ソロモンの死後、その子レハブアムは愚かにも強制労働をさらに増やすと民に宣言しました。その結果、イスラエルの民はレハブアムを王とすることを拒絶し、国はユダ王国（南王国）とイスラエル王国（北王国）に分裂し、レハブアムは南王国の王に留まりました。一方で、北王国の王となったヤロブアムは、民がエルサレムの神殿に上ることを止めるために、ベテルとダンに金の子牛を置き、これらを北王国の礼拝所としました。しかし、これは主の命に背いた罪です。続く北王国の王たちもこの罪から離れることなく、ついに主はイスラエルを捨ててることを宣言されました。

南王国には一時的な宗教改革がアサ王によってもたらされました。しかし、北王国はヤロブアムの罪を離れることはあ

りません。クーデターによりヤロブアム一族は滅び、オムリ一族が王位を握るに至ります。確かに北王国はオムリ一族の統治下で経済的には発展します。また、サマリアが新たに都として選ばれます。しかし、主への信仰の観点から見ると、オムリ一族はヤロブアム一族となんの違いもありませんでした。そればかりか、オムリの子アハブとその妻であるイゼベルがカナンの神であるバアル礼拝を進めた結果、信仰の観点から見た暗黒時代が北王国に訪れました。

②北王国と預言者（I 17章～II 8章）

北王国の暗黒時代は同時に預言者の全盛期でした。北王国の王家であるアハブ一族、その不従順とバアル礼拝に対抗して、主はエリヤとエリシャを始め多くの預言者を起こされました。それは主に敵対するあらゆる存在に対する主の完全な勝利を示すためです。バアルの預言者たちとの戦いではエリヤを通して、アラムとの戦いでは（驚くことに）不従順なアハブを通して主はその力を表されました。また、ナボテのぶどう畑を奪うというイゼベルの不正に対して厳粛な裁きを主は予告され、アハブは預言者の言葉どおりアラムとの戦いで命を落とします。さらにアハブの子アハズヤもエリヤの言葉ど

おりに病から回復せず死んでいきました。さらに、アハブの子ヨラムが王であった時代、主は渇水、飢え、死、病、強敵に対する勝利をエリシヤを通して与えられました。

③クーデターと改革（Ⅱ9～12章）

バアル崇拜が蔓延まんえんした北王国にクーデターを起こしたのは、預言者によって主の御心を知らされたエフーでした。彼はイゼベルとアハブの子どもたちを処刑することによってバアル崇拜者を一掃し、北王国の王権を自らのものとししました。しかし、彼もヤロブアムがはじめた金の子牛礼拝を廃止しませんでした。

アハブの娘であるアタルヤは南王国の王家に入り、南王国にバアル崇拜を蔓延させました。そして、息子であるアハズヤ王が若くして死んだ時、王家の子孫を抹殺して自らが南王国に君臨したのです。しかし、祭司エホヤダと幼い王ヨアシユによって彼女の野望は打ち砕かれました。その後、成人したヨアシユはエルサレムの神殿の修復を行い、主への礼拝を復興させました。

④サマリヤ崩壊（Ⅱ13～17章）

預言者エリシヤの死（13章）以降、両王国の王については短い記録が続くのみです。たとえば、北王国の経済的最盛期の王ヤロブアムについてはわずかな記述に留まっています（14・23～29）。やがてメソポタミアの大国アッシリアはその影響力をイスラエルにまで伸ばし、北王国の民の一部が捕らわれて、国を離れます（15・29）。

ついに北王国の滅亡の日が到来します。親アッシリアの方針で進んでいた南王国をアラム王レツィンと北王国の王ベカが攻めた時、逆にアラムはアッシリアによって滅ぼされてしまいました。そして、ホセア王の時代、北王国はアッシリアに再度背き、首都サマリヤは完全に破壊されます。北王国滅亡の原因は明白です。それは主の定められた律法に従わず、他の神々を拝み、ヤロブアムが設置した金の子牛の礼拝をやめなかつたからです。このようにして、主の言葉は確かに成就しました。

3 ユダ王国（Ⅱ18～25章）

①不従順と改革（Ⅱ18～23章）

北王国滅亡後、南王国は残りました。それは主がダビデに

対して約束されたからです(Ⅱサムエル7章)。また、アッシリアが勢力を伸ばしている時期に、南王国には主を信頼する王がいたからでもあります。ダビデに並ぶ善王と記されているヒゼキヤは「われわれは、われわれの神、主により頼む」(Ⅱ列王18・22)と告白し、アッシリアに最後まで立ち向かいました。そして、王国の多くの町が廃虚となる中、エルサレムは最後まで陥落しませんでした。なお、ヒゼキヤの確固たる信仰の背後には預言者イザヤをとおして語られた主の言葉があります。

しかし、ヒゼキヤの子マナセは父とは全く逆の行動をとり、偶像礼拝の罪を犯しました。その結果、主は南王国も滅ぼすと宣言されます。その一方で、続くヨシヤ王の時代、主の律法の書物が神殿から見つかり、それに則^{のっと}ってヨシヤは国の改革を行い、偶像崇拜を取り除きました。王のこの信仰ゆえに、主は国家の滅亡の日をわずかではありますが遅らされます。

②エルサレム崩壊と捕囚(Ⅱ24～25章)

ヨシヤ王の死後、アッシリアにかわってバビロンが勃興^{ぼっけい}し、ついにユダ王国にまでその侵略の手を伸ばしてきました。一時はバビロンに隷属していたエホヤキム王は翻^{ひん}って反逆し、

その結果、次のエホヤキン王の治世にエルサレムはバビロン軍に包囲されてしまいます。そして、王はバビロンに降伏し、第一次バビロン捕囚が行われました。続くゼデキヤ王(ユダ最後の王)は、バビロンによって立てられたにもかかわらず、後にそれに背きます。その結果、バビロンの軍勢によってエルサレムの城壁は破壊され、町は火で焼かれて廃虚と化しました。ダビデから始まった王国は滅亡し、神殿は跡形も無くなり、王は途絶え、人々はバビロンへと捕らえ移されました。すべての希望が崩れました。

しかし、そのような中でも列王記Ⅱはエホヤキンがバビロンにおいて牢獄から出された記事をもって終わっています(25・27～30)。二つの王国の悲劇の書は幕を閉じますが、主の憐^{あわ}れみのみわざはもうすでに始まっていることが示唆されています。主に希望を置く者を主は見捨てられません。

(※「牧羊者・二〇〇六年度Ⅱ巻」に掲載されたものを、一部再編集して掲載しました。)

聖書 ミカ5・2～5

タイトル イスラエルを治める者

暗唱聖句 だが、あなたからわたしのために

イスラエルを治める者が出る。

ミカ5・2

目標 平和の神のご支配の中を生きる者となる。

導入

(後藤 真)

新しい年が始まりました。年のはじめには心も新しくなったような気がしますね。けさはみなさんに「王様を新しくしましょう！」と言いたいと思います。

王様というのは、力を持つて国を治める人です。王様が治める国を王国と言います。昔のイスラエルは、ダビデやソロモンのような王様が治める王国でした。良い王様のときはイスラエルは良くなり、悪い王様だとだめにになりました。王様は力があるから楽して人に命令すれば良いわけではありません。王様は責任重大なのです。

みなさんは良い王様と悪い王様、どちらの王様の国に住みたいですか？ もちろん良い王様ですね。

ミカ

ミカ書には、ミカという預言者のことばが書かれています。ミカが預言したころの王様はあまりよい王様ではありませんでした。別の神様を拝んだり、神様ではなく外国の力に頼ったりするような王様でした。それでイスラエルでは本当の神様を礼拝する人が減ってきて、国が乱れていました。金持ちは貧しい人から土地を取り上げたり、裁判官にお金をわたしてさばきを曲げたりしていたのです。

神様はとても悲しい気持ちだったでしょう。それで預言者を通してイスラエルに、悔い改めて神様に立ち返るように何度も伝えました。それなのに、王様もイスラエルの人たちも神様のことばを聞きませんでした。

それで神様はしばらくの間、強い大きな外国を用いてイスラエルを滅ぼすことを決めます。ミカやミカと同じころの預言者たちは、このつらい預言を語らなければならなかったのです。

新しい王様

けれども神様は、イスラエルを滅ぼしたままにしておこうとは考えていませんでした。新しい王様を立て、イ

スラエルを立ち直らせることを約束します。

その新しい王様は、ベツレヘム・エフラテから出る方です。ベツレヘムはダビデ王が生まれた村でした。でもエルサレムのような大きな町ではなく、小さな村でした。そんな小さなベツレヘムからイスラエルを治める新しい王様が生まれる。それはびっくりするような神様の約束でした。

それだけではありません。新しい王様は、神様の力によって治める方です。また、羊飼いが羊を飼うように、人々を大切にしてくださる王様です。いばつて命令し、言うことを聞かせるような王様ではありません。なんとすばらしい王様でしょうか。

ミカを通して語られた神様の預言、約束は実現しました。新しい王様とは、今から二千年ほど前、ベツレヘムに生まれたお方。そう、イエス様です。イエス様は王様なのに人々に仕えられるのではなく、人々に仕えました。病気を治し、悪霊を追い出し、聖書を教え、十字架にかかって死に、三日目によみがえってくださったのです。

イエス様は地の果てまですべてを治める王様とさせていただきます。イスラエルだけではなく、わたしたち

の王様なのです。そして憎み合う心を愛し合う心に变え、世界を平和に導くお方です。

良い王様 YHWH SHALOM

良い王様であるイエス様は、いまも生きていてわたしたちの王様でいてくださいます。どうすればイエス様に王様になっていただけるのでしょうか。それは、わたしたちの心の真ん中に自分ではなく、イエス様にきていただくことです。自分が得することではなく、イエス様が喜ぶことを考えて生活するとき、イエス様はわたしたちの王様でいてくださいます。

もうひとつは、いっしょに礼拝し、お互いにお祈りして、話し合うことです。イエス様は、イエス様を王様としようとしている人の集まりの中に、いてくださいます。イエス様がいてくださるとき、わたしたちは互いに愛しあい、相手のことを考えられるようになります。

イエス様にいっしょについていきましよう。イエス様はわたしたちを正しく導いてくださる良い王様、最高の王様なのです。

♪われらの主にむかって♪ (PW 33)

聖書 ミカ5・2～5 テーマ イスラエルを治める者

序論

(小泉 創)

新しい年になりました。この一年も、様々なことがあ
るでしょう。主の変わることのない希望のメッセージを
お聞きいたしましょう。

一、小さな町ベツレヘムよ(2)

預言者ミカの時代、北王国を壊滅させた大国アッシリ
アの脅威は南王国にも迫っていました。イスラエルが危
機的な状況に陥っているのは、彼らが神を捨てて偶像礼
拝に陥ったからです。預言者を通して何度も警告は発せ
られましたが、神の言葉を侮る人々は聞く耳を持たず、
事態は悪い方向に進んでいったのです。

そのような中で、神はミカを通して良き知らせを伝え
ました。それは神の民を治める新しい王が与えられると
いうものでした。ベツレヘム・エフラテはダビデの生ま
れた町です。ダビデの故郷とはいえ、他の町と比べてと
るに足りないと思われるいた小さな町から、腐敗、罪(3

章)と無縁な新しい王が与えられるというのです。

ミカが預言したこの新しい王は、イエス・キリストに
他なりません。ミカの時代から7百年の後、この預言が
成就しました。小さなベツレヘムの町の、さらに目立た
ない家畜小屋に、真の王であり、すべての人を救うキリ
ストがあらわれたのは、主なる神の熱心さによるのです。

二、キリストによって養われる群れ(3、4)

〈それゆえ、彼らはそのままにしておかれる。産婦が
子を産む時まで〉というみ言葉の通り、百数十年後、南
王国ユダも敵に渡され散り散りになります。しかし、そ
の中から主に立ち返る者たちが起こされます。一時は敵
の手に渡され、事態が悪くなるように見えたとしても、
その中で神のわざは進められていきます。神のご計画は
裁きで終わらず、回復の約束があるのです。

散り散りになった神の民、(彼は立って、主の力と、彼
の神、主の御名の威光によって群れを飼う。そして彼ら
は安らかに住まう)という約束は、よい羊飼いであるキ
リストが実現なさることです(ヨハネ10・11)。私たちは
どのような時にも希望となってくださるキリストに目を
留め、そのあとをつけていくのです。

三、地の果てまで及ぶ平和(5)

多くの人が平和を望んでいるのに、現代でも争いは止まず、血も涙も流され続けています。

「あなたがたの間の戦いや争いは、どこから出て来るのでしょうか。ここから、すなわち、あなたがたのからだの中で戦う欲望から出て来るものではありませんか。あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。∴自分のものにならないのは、あなたがたが求めないからです。求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです」(ヤコブ4・2〜3)。

争いの原因は私たちの内にある罪です。神は強大な武力によってではなく、無力さの象徴である十字架の死とよみがえりによって平和をつくられます。私たちは主が与えてくださる平和をいただき、平和をつくり出す者にしてくださいませ。

二〇〇一年からアフガニスタンにアメリカが軍事介入し、昨年撤退するまで、タリバンとの長い戦いが続きました。しかし撤退と共に再びタリバンが権力を握り、武力では平和はつくれないことが明らかになりました。こ

の間も政治は腐敗し、多くの市民が戦いに巻き込まれ命を落とし、憎しみの連鎖は続きました。一方、二〇一九年に銃撃され命を落としたクリスチャン医師、中村哲さんたちの、荒野に用水路を造った働きは、多くの人の病を癒し、希望を与えるものとなりました。今もその働きは受け継がれ、人々を生かす働きとなつていきます。人の働きを通して神は平和をつくつてくださいます。

結論

私たちは弱っている者たち、小さな者たちが、主にあって立ち上がる力を与えられ、素晴らしい名があがめられる完成の時、主の再臨を待ちわびています。

「主は多くの民族の間をさばき、遠く離れた強い国々に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない」(4・3)。

主を信じる者たちには平和の主のご支配が始まっています。私たちも平和を与えられた者として、この約束を胸に抱きつつ、この一年、平和をつくる働きをしていきましょう。

研究資料

(金井由嗣)

「神の国」について

今回から四週にわたって聖書が教える「神の国」のメッセージについて学ぶ。この教えの全体像を簡潔に学ぶには『聖書神学辞典』の同名の項目が、詳しく学ぶにはラッド『神の国の福音』がお勧めである。主イエスの教えの核心としての「神の国」についてはボウカム『イエス入門』の第四・五章を参照。

預言者ミカとその時代

ミカはイザヤとほぼ同時代の人である。ミカ4・1と3とイザヤ2・2と4には同一の預言が記されている。彼らは神の民イスラエルの罪(偶像礼拝、富者による貧者の搾取、不正な裁き)を厳しく糾弾し、「平安」を唱える偽預言者に反対して神の裁きとしての亡国とバビロン捕囚を予告する。しかしそれにとどまらず、捕囚の地で悔い改めた「残りの者」による国の再建と「終わりの日」のメシア王国の到来をも預言する。彼らの預言が主イエスによる「神の国の福音」の先触れとなり、旧約と新約を繋ぐ役割を果たしたのである。

テキスト

新共同訳、聖書協会共同訳では節が1つずつずれることに注意。2 1節の記述は、エルサレムが敵軍(アッシリア軍。イザヤ36章参照)に包囲されている中でこの預言がなされたことを示している。大国の軍事力に神の民が屈しようとしている中で、神の視点から見た救いのメッセージが力強く語られる。ベツレヘム・エフラテエフラテはベツレヘムの別名(創世記35・19)。この地名はダビデ王の出自と常に関連付けられている(サムエル上17・12、詩篇132・6他)。エルサレムの腐敗した王権に代わって、ダビデの家系から新しい王が立てられることの預言である。あなたは 擬人法でベツレヘムに呼びかけている。神の特別な顧みが表示されている。小さい 質的な意味で「取るに足らない」の意味。七十人訳では「最も小さい」と意訳され、その解釈はマタイ2・6にも反映されている。出るは未完了相であり、七十人訳が未来形で訳しているように、将来の出来事の予告であるが、それは「昔から、永遠の昔から」の決定事項として語られる。ダビデ王家の「ルーツ」にメシアの起源があることがここでも意識されている。

3 それゆえ 新共同訳は「まことに」と訳すが、ここでは前節を理由とする順接と理解したほうが良い。聖書協会共同訳も「それゆえ」と訳している。「イスラエルを治める者」が「出る」のは未来の出来事であり、それまで神の民はそのままにしておかれる。占領状態はメシアの出現まで続く。口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳はこの動詞の主語を主なる神と取る。「産婦」と「子を産む」は同語根が重ねられている。「産婦」はミカ本来の文脈では信仰共同体としての「娘シオン」(4・10)を指す。そのとき 原文は接続詞〔へ〕ワウでつないでいるだけだが、文脈を考えて適切に訳している。兄弟たちの メシアの兄弟という意味ではなく、イスラエル共同体の結びつきを指す用語。ほかの者 「残りの者」と訳される場合もある、捕囚と回復の預言において鍵となる重要な用語。背信の罪に問われたイスラエルの中で、悔い改めて信仰に立ち返る人々を指す。イスラエルの子らのもとに民全体が同時に回心するのではなく、悔い改めた「残りの者」が民のもとに帰る時にイスラエルの回心と救いが起こる。「ほかの者」〔へ〕イエテル」は単数形だが「帰る」の動詞は複数形であり、集合名詞として用いられている。

従って4節の主語彼(動詞も単数形)は「残りの者」ではなくメシアである。彼は「立って」、「主」の力」と「彼の神、主」の御名の威光」により主の群れを「飼う」、その結果「彼ら」(主の群れ)は「安らかに住まう」。これらの動詞と副詞句の組み合わせは幾通りも可能だが、全体の意味は明白。新改訳2017と聖書協会共同訳が文法的には最も自然な訳である。「安らかに住む」には3節の「帰る」と同じ動詞が用いられている。「今や」はメシアの到来の時点を指す。その時メシアの「威力が、地の果ての果てまで及ぶ」。

5 平和は次のようにして来る メシアの到来による神の王権の確立こそ真の「平和」〔へ〕シャローム)である。新改訳は動詞〔へ〕ハーヤー)の語義を「なる」と解釈してこのように意訳している。新共同訳、聖書協会共同訳はハーヤーの主語をメシアとして、「この方こそ平和である」のように訳す。どちらも可能である。

参考図書 『聖書神学辞典』、ラッド『神の国の福音』、ボウカム『イエス入門』、ヘッシェル『イスラエル預言者上』、ウォルトキー(ティンデル) Allen (NICOT), Mays (OTL), McKane (T&T Clark)。

聖書

マルコ1:14、15

タイトル

あなたは招かれています！

暗唱聖句

時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。マルコ1:15

目標

約束されていた神の国がキリストを通して始まったことを知る。

導入

(飯田勝彦)

バプテスマのヨハネから洗礼を受けられたイエス様の上に、聖霊が鳩のようになり、上からの力で満たされました。そして、サタンの誘惑に勝利され、大胆に宣教を開始されたのです。イエス様の生涯は、いのちがけで宣教された生涯でした。

時が満ちた

その最初の言葉は、「時が満ち」たでした。これはどういう意味でしょうか。皆さんの中で「時が満ちる」と言う言葉を使いますか？ 例えば「時が満ちたから学校に行こう」「時が満ちたので卒業しました」と言いますか？ あまり言わないですね。この言葉は、「神様の約束された時が来ました」と言う意味です。

私たちはみな、罪人です。罪は、最初の人間アダムとエバが神様の約束を破った時から、私たち人間が内に持っているものです。ですから、「僕は罪を犯したことがありません。僕は罪人ではありません」とは言えないのです。悲しいけれど皆さんが「オギャー」と生まれた時から心の中に罪をかかえているのです。神様は、アダムとエバが罪を犯した時から、罪人である私たちを救おうと計画しておられました。しかし、イエス様が来られるまでは、その救いの実現の時はまだ来ていなかったのです。

イエス様が来られることによって、救いの時がやって来たのです。イエス様もそのことをよくご存知でした。時が満ち、神様の救いの約束の時が来たことで、今、私たちはイエス様による救いを頂くことが出来るのです。

神の国は近づいた

続けてイエス様は「神の国が近づいた」と言われました。皆さんは神の国ってどのようなところだと思いますか？ 綺麗な景色や美味しい食べ物、楽しいゲームがいっぱいあって、いつまでいても飽きないところでしょうか。

この神の国とは、神様の恵みが満ちているところです。

イエス様は、神様の恵みに満ちた人でしたので、神の国はイエス様の中にあります。ですから、イエス様を心に受け入れる人の中に神の国は始められるのです。何と素晴らしいことでしょうか。イエス様は、罪に苦しんでいる多くの人々を神の国に招くために宣教されました。神の国は近づきました。皆さんは、神の国に入っていますか？

悔い改めて福音を信じなさい

神様の恵みがあふれている神の国は、イエス様によって始まりました。イエス様は皆さんのことも、恵みで満ちた神の国に招いておられるのです。

では、どのようにしたら神の国に入ることができるのでしょうか。それは、イエス様が言われたように、「悔い改めて福音を信じる」ことです。神の国に入っていない心は、罪でいっぱいです。私たちは心にあるものが口から出て来ます。また、心の中にあるものが行動となります。もし、皆さんの心の中に、友だちに対して「あの人なんていなかったらいいのに」という思いがあるなら、口からはその友だちに対する悪口が出て来たり、友だちをいじめたり、無視したりという行動が出て来たりします。罪があると友だちを傷つけるだけでなく、自分も傷

つき苦しんでしまいます。ですから、自分の罪を正直に神様の前に悔い改める必要があるのです。悔い改めるとは「方向転換」することです。今まで神様に背を向け、罪の道を歩んで来たことをお詫びして、180度方向転換するのです。そして、私たちの罪のために十字架で命を投げ出し、3日目に死の力を打ち破ってよみがえられたイエス様を心の中で信じ受け入れるのです。

罪から自由にしてくださるイエス様を信じ受け入れるなら、イエス様が私たちの心に住んでくださいます。その時、イエス様にあつて心は恵みに満たされ、神の国は私たちの中に始まっていくのです。

まとめ

皆さんの心はイエス様の恵みで満ちあふれていますか？ 悔い改めてイエス様を信じましょう。

イエス様は、皆さんを神の国に招かれています。イエス様を信じて歩むなら神の国はあなたの中に与えられます。そしてイエス様は、神の国、神の素晴らしい恵みが他の人々にも広がって行くために、皆さんを用いられます。

♪主にしたがいゆくは♪ (コ 53、ホ 87他)

聖書 マルコ1・14〜15 テーマ 神の国は近づいた

序論

(大頭真一)

主イエスは、年およそ30歳で公に宣教の働きを始めた。その時語られた福音とはどのようなものだったのであろうか。まず福音はよき知らせ、グッドニュースであることを十分に理解したい。ニュースとは事実の報道である。信じるかどうかは聞く人次第であるけれども、聞く人の反応に関係なく事実は存在する。第二次世界大戦が終わったニュースを信じないで、30年間ジャングルの中で戦い続けた方がおられたことをご存じだろうか。何という悲劇だろう。

一、時は満ちた

「わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ」(創世記3・15)という御子の派遣の約束以来、繰り返されてきた神の恵みの支配の預言はついに実現した。その時がきたのである。

時が満ちたのは、神がそのイニシアティブを取って満ちさせられたからである。神は損なわれた世界を回復するために主イエスを遣わされた。時が満ちたから主イエスが来られた、というよりもむしろ、主イエスが来られたから時が満ちたのである、と覚えたい。「私よりも力のある方が私の後に来られます」(1・7)と言ったパペテスマのヨハネは、自分が時が満ちる直前の人であることをよく知っていた。

〈時が満ち〉の持つ圧倒的な勝利の響きに注意したい。次の〈神の国が近づいた〉に見られるように、神の国は始まったけれども完成していない。けれども、新約聖書において支配的なのは「始まった」の響きである。決定的に新しい時代が到来した。主イエスが来られた世界はもはや以前の世界と同じではない。だから救いは今、ここで可能なのである。

二、神の国は近づいた

神の恵みの支配である神の国が始まる以前には、人々はサタンとその悪の力の支配の下にあった。罪と悪魔の圧制からの救いこそが神の国のもたらす現在の実である。

る。しかし、この解放のために御子の十字架があつたことを忘れてはならない。「…それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした」(ヘブル2・14～15)とあるように。

始まつたけれども完成していない神の国において、死はいまも存在する。しかし永遠の命は死を超える。誘惑は今も存在する。けれどもキリストと一つにあるならば、私たちは罪から守られる。病の床も悲しみに終わらず、賛美と証の祭壇となる。このように、私たちは完成へ向かう世界の中で苦しみつ喜び、歌いつつ痛む。そうしている内にも神の国は成長している。そしてやがて主が再臨なさるときに、損なわれた世界に完全な回復が訪れるのである。

三、悔い改めて福音を信ぜよ

ここに福音の宣言は単なる宣言にとどまらず、私たちへの招きとなる。すでに始まつた神の国へ飛び込むようにと主はお命じになるのである。

神の主権は人間の自由な応答と共存する。救いは一方

的な神の恵みでありながら、人間の側の応答なしには成り立たない。これがアルミニウスやウエスレーの信じた神人協働説である。つまり、もし誰か^{だれ}が滅びるならその責任は神ではなく、招きに^{だれ}応答しなかった人間の側にある。

招きへの応答は悔い改めてイエス・キリストへの信仰である。(悔い改め)(ギ)メタノイア)は心の向きを転換するという意味をもつ言葉。自分の罪に気がつき、赦しを乞うて、これまでの自分中心に生きてきた生き方を神中心に転換することである。悔い改めと信仰を切り離すことはできない。「罪を悔いて赦しを求めることをしなれば、神を信頼して生きることはできない」(内田和彦著『キリスト教は初めて』という人のための本」90頁)からである。

結論

今日の個所の直後、16～20節にはシモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの4人の弟子への召命と彼らの即座の服従が描かれている。もちろん、これは彼らだけのことでない。福音を聞くすべての人は、このように主イエスを信じて従うことを期待されているのである。

研究資料

(宮澤清志)

今週のテーマは「神の国は近づいた」という題である。暗唱聖句は「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ1・15)。

このみ言葉は、イエスのメッセージの中心であるといわれる。イエスというお方はどういふことをお話してくだされたのか、と問われた時に、まずこのみ言葉をもって説明される。

テキスト

14 **ヨハネが捕えられた後** 直訳は「ヨハネが引き渡されて後」。ヨハネの時代が終わり、イエスの時代へと至る連続性が語られる。**ガリラヤ** イエスの宣教の中心地。**神の福音** イエスが宣べ伝えたのは「神の福音」であった。神の福音とは「神についての福音」と理解することもできるが「神から与えられた福音」と理解する立場の方が多い。**福音** については後で述べる。

15 **時が満ち** 神が定められた時が到来した、という意味。すなわち旧約におけるご自身の約束が成就するために、

神が定めておられた時が到来した、という意味である。**時** とは〔ギ〕カイロスという言葉である。この「時」とは、神の計画の中で定められている終末の救いの「時」であり、「正しい時」「適切な時」「好ましい時」「ある定まった時」「危機の時」「最後の時」といった意味を持つ。新約聖書では、「満ちる」の他に「完了する」「成就する」「完成する」「実現する」といった意味に訳されている。イエスは「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思つて、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです。」(ヨハネ5・39)と語られたように、旧約聖書はキリストの来臨を預言している書なのである。その旧約聖書がキリストの到来を通して実現成就したという宣言なのである。**神の国が近づいた** 「神の国」とは、人間が考えるような理想郷(ユートピア)や、空のかなたにあるといったものではなく、神の恵みの支配を指す。神が王として支配することであり、神の栄光、神の正義、神の平和、神の救いが満ちているところである。その神の恵みの支配が「近づいた」と語るのである。この「近づいた」を、到来した、という意味に解する説もある(実現された終末論)。「時が満

ちた」のであるから、神の支配も実現したというのである。またこの「近づいた」を、将来のことと理解する説もある（徹底的終末論）。しかし、ある学者は、この言葉「イエスの到来によって、神の恵みの支配が始まった。しかし、それはもう一度イエスが来臨なさる時に完成するのである」（開始された終末論）という考えを示した。聖書にはその両面が記されている。イエスの到来によって、確かに神の国は現実のものとなった。しかし同時に、この神の国はキリストの再臨によって完成するものであって、聖書はこの両者を語っているのである。悔い改めて福音を信じなさい もう一つ、イエスが主張されたことは悔い改めと信仰である。イエスのメッセージの中心は「神の国」であり、その神の国に入るために必要な条件が「悔い改めと信仰」ということである。「悔い改め」とは、原語的な意味としては「よい方へ（あるいは悪い方へ）心を変える」という意味である。新約聖書では、人間の生きる姿勢全体の転換を表し「明らかにされた神の姿に合わせた生き方を取る」という意味として用いられる。すなわち「悔い改める」とは、生き方の一部の手直しではなく、生き方全体の方向転換を意味する。また、

悔い改めの対象は、罪の結果に対しての悔い改めではなく、罪そのものに対しての悔い改めを指す（マルコ1:4）。この点、後悔とは決定的に異なる。この悔い改めが神の民とされるための消極的側面であるのに対して、「福音を信じる信仰」という側面は神の国への積極的側面であると言えよう。「福音」とは、古典ギリシャ語では、よい知らせをもってきた者に対する報酬という意味で用いられた。しかし、後にはよい知らせそのものを指して用いられている。イエスが宣べ伝えた神の国は「よい知らせ」（福音）であり、マルコはこの「よい知らせ」（福音）がイエス・キリストによってもたらされたものであり、何よりもこの福音はイエス・キリストそのものであると語るのである。そして、そのイエス・キリストを私にとつての「よき知らせ」（福音）として信じる信仰が、神の国に生きる民には必要なのである。

参考図書 A. T. Robertson 「Word Pictures in the New

Testament I」(BROADMAN)、小林和夫「栄光の富Ⅱ」

(日本ホーリーネス教団出版局)、他

聖書

ルカ17・20～21

タイトル

神の国は私たちのただ中に

暗唱聖句

見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。

目 標

ルカ17・21

神の国が、信じる者たちの間では既に現実の恵みであることを知る。

導入

(土屋開夫)

1月の教会学校は、「神の国」がテーマです。

ところで皆さん、去年のオリンピックとパラリンピック、観ましたか？ 特に開会式を見ていたら、世界には色んな国があるんだなあって思いましたね。

ここで一つ、皆さんに質問です。「国」特に「王国」をつくるためには、三つのものが必要です。何が必要でしょう？ 答えは、①まず王様、②国民、③場所です。この三つが王国には必要なんですネ。

(お金や軍隊という答えを言う子もいるかも?)

神の国をつくるために

先週のメッセージを覚えていますか？ イエス様が救

い主として活動を始められた時、「時が満ち、神の国が近づいた。」(マルコ1・15)と言われましたね。イエス様は神の御子です。そして神の国の王様です。その神の国の王様であるイエス様が、高い高い「天」から、私たちの地上に来て下さったのです！ ということは、まさに神の国が私たちに近づいたのです！

イエス様が天から地上に来られた目的は、「神の国」をつくることです！ 最初に質問したように、王国をつくるためには、①王様、②国民、③場所が必要です。

はい、じゃあ確認、①の神の国の王様はだれですか？ そう、イエス様です。でも、王様がいるだけでは王国になりません。それでイエス様は、イエス様のことを「王様」として認めて受け入れてくれる「国民」を求めて、私たちの所に来られたのです！

一番大事なのは

ある時、パリサイ人たちが、「神の国はいつ来るのか」とイエス様に質問しました。パリサイ人たちはどういう意味で質問したのでしょうか？ 昔、ダビデさんが王様だった時のように、この地上で王国が新たに始まると

思ったのかも知れません。

私たちも、「国」と言えば、まず「どの辺にあるんだろう？」と場所のことを考えます。でも、「国」ととって一番大事なことは「誰が王様か」「どんな王様か」ということです！

そこでイエス様はこう答えられました、「神の国は、目に見える形で来るものではありません。『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」
彼らの目の前には、彼らの真ん中には、まさに神の国の王様であるイエス様ご自身が立っておられました！
このイエス様を「私の王様です！」と受け入れる時、その人は「神の国の国民」とされるのです！
つまり、「神の国」とは、場所というよりも、イエス様を王様とする人たちの中にあるのです！
（ちなみに、「神の国」にもちゃんと「場所」はあります。それはまた来週のお話です。）

誰が王様？

皆さんは、このイエス様を自分の「王様」としていま

すか？ 「王様」とは一番偉い人のことです。なんてったって「王様」なんですから。

私たち人間には、必ず「王様」が必要です。必ず何かの王様に従うように出来ているのです。多くの人は「自分」が王様になっています。「私が一番偉い。何でも自分のやりたいようにやるんだ」と。ある人は「犬」が王様になっているかも知れません。なんでもワンちゃん中心。ある人は「お金」。ある人は「推しのアイドルやアニメキャラ」かも知れません。現代人も皆それぞれの「王様」に仕えています。

でも、尊い神の御子イエス様は、天から私たちの所に来られ、「わたしをあなたにとつて一番大切な王様として心に迎え入れてくれませんか？」と、全ての人に語りかけておられます。イエス様を王様として心に迎えた時、イエス様の愛と平安に満ちた「神の国」が、あなたの心に来る（始まる）のです！

♪われらの主にむかって♪ (PW33)

聖書 ルカ17・20～21 テーマ 神の国は私たちのただ中に

序論

(中島啓一)

パリサイ人がイエス様に「神の国はいつ来るのか」と尋ねたとき、イエス様は「神の国は、目に見える形で来るものではありません」と答えました。ここに、両者が思い浮かべているイメージのずれがありました。

一、神の国に対する誤解

パリサイ人は、「神の国」を目に見える領土を持った地上の国だと思っていました。ローマの支配下で苦しい生活を強いられていた当時のイスラエルの人々は、その苦しみから民族を解放する救い主が現れ、その手によって地上に樹立される「神の国」を思い描いていたのです。

ここで神の「国」と訳されている言葉は、一番大もとの意味は「王権、王の支配」です。そこから派生して「王国、つまり王によって支配される領域」という意味になるのです。それなのに、このパリサイ人は、この一番大もとの意味を飛ばして、そこから派生した「目に見える国家」という意味でしか神の国を考えなかつたのです。神の国は、人

によって支配される地上の王国ではありません。王国にとつて一番大切なのは、誰がその国を統治するかです。ですから、神の国にとつて一番大切なことは、そこに「神の統治、神の支配」があることなのです。

二、見えないけれども見える国

ですからイエス様は、「見よ、ここだ」とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません、さらに、「神の国はあなたがたのただ中にあるのです」とおっしゃいました。一見イエス様は、神の国が人間の内面にあるものだとおっしゃっているようです。では、神の国は、現実世界とは関係のない、私たちの心の中だけのものなのでしょうか。

しかし、新共同訳を見ると「神の国はあなたがたの間にある」と訳されています。これは、「人と人との間」にあるということ、つまり神の国は、人の心の中というよりは、人間同士の交わりや関わりの中に、さらには現実の世界にあるのだという意味にとれます。そのことから振り返ると、新改訳2017や口語訳その他の訳の「あなたがたの(ただ)中にある」という訳し方は、こちらの意味にも取れるような気もします。果たしてどちらが正しいのでしょうか。

結論から言うと、どちらも正しく、両方の意味が含まれ

ていると言つてよいと思います。

救いは一面、内面的なものです。私たちが心の王座にイエス・キリストをお迎えするときに、救いが私たちに訪れます。私たちの内面の変革なくして、神の国は成立しないのです。ですから聖書は一貫して私たちの内面を重要視します。外面だけを重視したパリサイ人の形式的な律法主義を批判し、心の割礼（ローマ2・29）を強調するのです。

しかし、イエス様は一人一人の個人の救いだけを指して神の国（神の支配）とおっしゃったのではないのです。信じる者同士の交わりの中に、その愛し合う姿の中に、神様が愛をもって統治される様子が浮かび上がってくる、そんな目に見える「神の国」についてもイエス様はお語りになりました。そして、それこそが「教会」なのです。

ちなみに「見よ、ここだ」の「見よ」と「見なさい」。神の国は「見よ」と言えるようなものではないと語りつつ、「見なさい」とおっしゃるのです。ここに「神の国」の不思議な性質が表されていると言えるかもしれません。神の国は、見えないけれども見えるもの、その完成はまだ先だけども、信じる者にとって既に現実の恵みなのです。

三、神の国は私たちの手の中

ある注解者が「神の国はあなたがたの手の中に」という訳し方を提案しています。ここには、神の国の内面性と、神の国の現在性、可視性が両立されています。目に見えない神の国は、自動的に見えるようになるものではありません。私たちが互いに愛し合い、また愛をもって人々に神の国の良き知らせをお伝えするときに、初めて人々の目にも見えるものになるのです。

神の国は「既に／未だの国」と言われます。イエス様によつて神の国は既に始まりましたが、その完成は終わりの日まで待たねばならないという意味です。その完成のために遣わされるのが私たちなのです。

結論

イエス様が「神の国はあなたがたのただ中にあるのです」とおっしゃったとき、そこにいた人々の「ただ中」にいられたのは、他でもないイエス様です。イエス様こそ神の国は神の支配そのものなるお方なのです。天に昇られて今も目に見えないお方。しかし私たちがいつも共にあると約束されるお方。見えないけれども見える、そう信じる者たちの手に、神の国の福音は託されているのです。

研究資料

(中島啓一)

ルカは続編(使徒の働き)を書いた唯一の福音書記者であり、その神学の特長は、神の救いの歴史(救済史)において「教会の時」を強調する点にある。救い主を待ち望む旧約時代に続き、救い主によって「神の国」の到来が宣言された。しかし、それですべてが完成したのではなく、それから中間期としての「教会の時」が始まり、神の国の完成はその後の終末にまで持ち越されるのである。この「教会の時」こそが、今の私たちの時代、神の国は「既に(already)」到来したが、その完成は「未だ(not yet)」先という意味で「既に／未だの時」と呼ばれる時代、である。この時代に生きる私たちにとって、神の国の恵みは、未だ個人的な「お試し」のようなものには過ぎないのだろうか。それとも、それは既に味わうことのできる現実の恵みなのだろうか。そのことを知るための鍵が、今日のテキストには示されているのである。

さて、ルカ17・21を日英の主要な訳で読み比べると、そこに多少の違いがあることに気付かされる。邦訳では「…あなたがたのただ中に」(新改訳2017、口語訳。

聖書協会共同訳は「中に」、「…あなたがたの間に」(新共同訳)。英訳では「…あなたがの内側に(within you)」(KJV、TEV、NIV等)、「…あなたがたの間に(among you)」(NRSV、NAB等)。このように、英訳で見ると、神の国を内面的・個人的なものと捉える解釈(wihin)と、現在の・共同体的なものと捉える解釈(among)とに分かれている。邦訳では、新共同訳は後者に属するが、他の3つの訳は前者とも後者ともとれる訳し方に思える。果たして神の国は、私たちの内側と、私たちの間との、いったいどちらなのだろうか。

テキスト

20 神の国〔ギ〕へ・バシレイア・トゥ・セウウ) 一般に「神の国」と訳されることの多いこの表現は、新約全体で68回、そのうちの38回がルカ文書(ルカ福音書と使徒の働き)で用いられている(他に〔ギ〕バシレイアだけで神の国を指す用例を含めると総計47回)。この〔ギ〕バシレイアを辞典で調べると、①王権、王室の力、王室の支配、王国、②王国、つまり王によって支配される領域、③特に、終末論的な概念としての神による王的支配、とある。ここでわかることは、〔ギ〕バシレイアの第一義的な意味は

「王権、王としての支配、統治」であって、「王国」はそこから派生したものだということである。一般に「神の国」という訳語が定着しており、そこからはどうしても可視的、現在のな、あるいは政治的な国家を連想しがちであるが、イエスが語った^[ギ]バシレイア・トゥ・セウウは、そのような可視的な国家や領土を指すのではなく「神の支配」について言及しているのである。**見える形で**(^[ギ]メタ・パレテレーセオース) 哲学や科学、法律などの分野で用いられる単語で、きわめて実証的な用語。神の国はそうではないと言うのである。

21 見なさい(^[ギ]イドゥ) この語は他の訳では、注目を促す間投詞的に「実に」(口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳)、「いいですか」(新改訳第3版)と訳されているが、もともとは「見る(^[ギ]エイドン)」という動詞の命令形である。この節の冒頭 **見よ、ここだ** の「見よ」もまったく同じ^[ギ]イドゥであり、新改訳2017はそれが分かる訳となっている。神の国の到来に関する、「神の国はくものではない」という否定的部分と、「神の国はくにある」という肯定的部分の両方で、同じ^[ギ]イドゥが用いられていることは興味深い。ただ中に(^[ギ]エントス)

辞典では、①くの内側に (within, inside) / ②くの間に (among) とある。ノールランドは、二つの訳語それぞれの優位点を示しつつも、両者とも続く22〜37節との連携が上手くないかいないことを指摘し、三番目の訳語として「くの手の中に (in one's hands)」を提案している。釈義事典にも以下のような同様の指摘がある。「ここでのエントスは…唯心論的・個人主義的な意味(あなたがたの内面に)、あるいは集合的な意味(あなたがたのただ中に、あなたがたの間に)…ではない。…イエスの回答は神の国が始まる時点を尋ねるフェアリサイ人らの質問(20a)に関連づけられており、この回答の否定文の部分(20b、21a)はその質問を建て方が間違っただけの特色づけている。結びの肯定文の部分(21b)は質問者の(ただ受動的に待っているだけの)姿勢を能動的で個人的な努力へと変えるべきものである。」

以上のことを踏まえて聖書講解に進んで行きたい。

参考図書 注解書 Nolland (WBC) 他。その他「時の中心—ルカ神学の研究」(コンツェルマン)、「ギリシャ語新約聖書釈義事典I」(A Greek-English Lexicon of the New Testament and other Early Christian Literature 他

聖書 黙示録21・22、22・5

タイトル 神の国の完成

暗唱聖句 神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。

目 標 神の国の光景の素晴らしさを知り、キリストを信じてそこに入る者となる。

黙示録21・23

導入

(土屋開夫)

先週に続いて今週も「神の国」についてお話します。神の御子イエス様は、素晴らしい「神の国」をつくるために、天から地上に来てくださったのです。

先週のお話を思い出してください。「王国」をつくるためには、三つのものが必要でした。何でしたか？ そう、まず①王様、②国民、③場所です。

「神の国」の王様は誰でしたか？ そうイエス様です。では「神の国」の国民は誰でしょう？ そうです、イエス様を「王様」として信じ受け入れる人たちです！

皆さんは、イエス様を王様として受け入れましたか？ 受け入れたなら、あなたは「神の国」の国民です！ 「神の国」の名簿にちゃんと名前が刻まれています。その名

簿は「子羊のいのちの書」という名簿です。世界中で、これまでにイエス様を信じた人は、みんな名前が刻まれています。

神の国の場所

さあ、これで「神の国」に必要な三つの内、二つは分かりました。①王様は、イエス様。②国民は、イエス様を信じる私たち。では③の場所はどこでしょう？

勿論、どこにいてもイエス様と一緒になら、「神の国」だと言えます。また、イエス様を信じる人たちが集まる教会も「神の国」だと言えます。

でも、それだけではありません！ なんと、イエス様のお弟子さんのヨハネさんは、幻の中で「神の国」の様子をイエス様から特別に見せていただいたのです！ スゴイですね！ そしてそれを私たちに伝えるために「ヨハネの黙示録」に書き残してくれているのです。

都の様子

まずヨハネさんは、「新しい天と新しい地」を見ました。最初に創造された「天と地」は、もう過ぎ去ったのです。

そしてヨハネさんは、特にその中心地である「神の都」を見せてもらいました。

その都は、長さも幅も高さも同じ、真四角（立方体）の形でした。そして全体は、透き通ったガラスのような純金で、土台は12種類の寶石で飾られ、12ある門は大きな真珠で出来ていました。頭で想像するよりも、実際はもっともつと素晴らしく輝いていることでしょう！

そして大事なポイントは、この都自体が「神殿」のよなものだということです。旧約聖書の時代から「神殿」というものがありました（それ以前は「幕屋」）。神様を礼拝するための場所です。でも、神様がおられる一番奥の「至聖所」には、年に一度、大祭司さんが入れるだけでした。

でも、この「神の都」は全部が神殿のよなもので、私たちは神殿の中に入るよなものです！ その中心には、父なる神様とイエス様がおられて、その輝きが都全体を明るく照らしているのです。私たちは、その父なる神様とイエス様の光と愛に包まれて生きるのです！
この他にも、きれいな「いのちの水の川」が流れていたり、「いのちの木」があることが、黙示録には記されて

います。「神の国」の様子がこんなにハッキリ記されているなんて、聖書ってスゴイですね！

神の国の完成を待ち望む

イエス様はこう言われました、「わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです」（ヨハネ14・2〜3）。

イエス様は素晴らしい場所を用意して、私たちみんなを迎える日を楽しみに待っていてくださるのです！ ああ、その日のなんと待ち遠しいことでしょう！

その日を待ち望みながら、今も共にいてくださるイエス様を王様として、歩んでいきましょう！

♪まもなくかなたの♪

（新聖歌475、イン107、ふ57、PW48）

聖書 黙示録21・22と22・5
テーマ 神の国の完成

序論

(石田高保)

黙示録22章は聖書の最終章です。ということとは神の救いのご計画がここで完成することを示しています。ただ普通の書物と違うところは、最終章で本が終わるのではなく、ここから神と栄化された人々との歴史が始まり、それが永遠に続くという点です。それについてまでは私たちに知らされていませんが、永遠の世界の素晴らしさに胸を膨らませることはできます。

一、世の終わりについでにの工程表

さて今の世界がやがて迎える世の終わり(終末)がどのようになっていくかについて、聖書全体はかなり詳しく書いています(神の預言ですから100%実現します)。簡単に言うと、世の終わりは大患難時代と呼ばれ、それは7年間続き、その間に神を最後まで拒んだ人々が一掃され、キリストが再臨し、信じた人だけがイエス様の愛によって支配する御国みくにに入ります(御国を来たさせたままの御国です)。この至福の状態は千年続き(20章)、そ

のあと神を拒んだ人々がさばかれるために復活して最終的な判決が下されます(いわゆる最後の審判)。古い世界は一掃され、新しく創造された世界(新天新地)つまり「聖なる都エルサレム」(10)が天から降りてきます。神の子羊(イエス様)によって贖われた人だけがそこに入り、神と人を喜びながら永遠を過ごします。終末から新天新地までの工程表は、人間が考えたのではなく、神の言葉が言っていることです。安心して信じることができます。クリスチャンの未来への希望は絶対確実で、人間の予想や思想を寄せ付けません。ですから人生は70才か80才まで生きて終わりではないのです。地上の人生は走り幅跳びで言えば助走のようなものです。ゼビ過去・現在・未来にわたる神さまの救いのご計画全体を意識しながら信仰生活を送りましょう。私たちはご計画の最先端に置かれています。今の時代に再臨があれば、先に召された聖徒たちも栄化されますので、彼らはこの時代に再臨があるかもしれないと目を凝らしています(ヘブル11・40)。

二、旧世界の終わりと新世界の始まり

さて救いのご計画の大団円は、「聖なる都エルサレム」

すなわち神と神の子羊（キリスト）と（神のしもべたち）が終わりなく楽しむ世界です。神さまによる創造が永遠に続き、私たちもそれに参与するという気の遠くなるような特権と生きがいを与えられます。（世々限りなく王として治める）とありますから、贖われた人々が子羊と共に新世界を愛によつて統治することが約束されているようです。福音書と黙示録を題材にして書かれたC・S・ルイスの「ナルニア国物語」は四人の兄弟姉妹がそれぞれ王としてナルニア国を治めるようにライオン（イエス様）から任命されるところで終わります。しかしこれは始まりであり、聖なる都エルサレムはひとりひとりの個性と賜物に見合った天職を授けられ、永遠に創造し続ける世界です。こんな質問があります。「あるホテルに特別なスイートルームがあつて、そこではあらゆるごちそうをいつでも食べられ、あらゆるゲームや映画やドラマが楽しめる、豪華なジムも完備され、ベランダには広いプールがあり、しかも無料で提供されるとしたら、使いたいですか。ただし一つだけ条件があります。それは死ぬまでそこから出られないことです」。この条件を出されたら誰も使いたいとは思わないでしょう。つまり永

遠の都は遊んでばかりいる退屈な世界ではありません。

その証拠は御座からいのちの水の川が流れてその両側にはいのちの木が実り、それを食べると都の住民のすべてが癒された（力づけられた）という記述です。私たちは現在、聖霊を体感することはできません。しかし聖なる都では聖霊を実感し、神の愛を全身全霊で感じ、神のいのちがみなぎるのを覚えます。ここにおいてもなおお祈りさまを目で見ることができないのは地上と変わりがありません。しかし見えなくても全く問題なく、神さまと一体となるのが現実になります。私たち「子羊の妻である花嫁」（21・9）は夫婦が一体であるように、三位一体の神の交わりに実体として入ります。「父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください」（ヨハネ17・21）というイエス様の祈りが成就するのです。

結論

本章は救いのご計画の結末ですが、同時に永遠に終わらない至福の世界の始まりです。旧約の聖徒たちよりはるかに多くの啓示を与えられている私たちが、これを励みとしないではいけないのではないでしょうか。

研究資料

(金井由嗣)

文脈と思想

黙示録については近年、死海文書をはじめとする同時代のユダヤ教文献の研究によって各種の象徴が意味する内容の多くが明らかにされており、それを踏まえた注解書や研究書が多く刊行されている。日本語で読める本としては岡山『小羊の王国』と同『ヨハネ黙示録注解』、ポウカム『ヨハネ黙示録の神学』が特に優れている。最初これららの書の総論を読んで、黙示録全体のメッセージを把握しておかれることをお勧めする。

黙示録の執筆目的は、迫害の中にある信仰者がこの世と妥協せずに戦い抜くよう励ますことである。そのため神とキリストの究極的な主権が宣言され、勝利者への栄誉と、来るべき新天新地のすばらしさが描き出されている。本日の箇所はその新天新地の中心、神とキリストが支配する都「新しいエルサレム」の描写である。

テキストト

21・22 全能の神である主と子羊が、都の神殿 黙示録の描く終末には、旧約のメシア預言の成就（神の民イス

ラエルの回復）と、新約において啓示された神の御子・子羊イエス・キリストの王国の完成という両面がある。終末におけるエルサレムの回復はイザヤ(52・1)、エゼキエル(40章以下)らの見た幻だったが、聖所(神殿)が存在しない聖都は彼らの理解を超えていた。神殿は神の臨在を象徴し、神を礼拝するための場所であるが、新しいエルサレムには主なる神と御子イエス・キリストが臨在しておられるため、聖所は必要ない。十字架によって神と人との隔ての壁が取り去られた結果、「顔と顔を合わせて」神を見ることができるようになる(1コリント13・12、Ⅱコリント3・18)。神との隔てなき交わりこそが、救いの完成なのである。

23 これを照らす太陽も月も必要としない この表現は22・5でも繰り返され、強調されている。神の臨在は光そのものであり、他の光を必要としない(イザヤ60・19～20)。ここでは「闇」に象徴されるすべての苦悩も存在しないのである(21・3～4)。

24 諸国の民は…地の王たちは… 新しいエルサレムでは、神の民に加えられた諸国民が登場する。終末のメシア王国が諸国民を支配するとの思想は旧約にも見られる

が(イザヤ60:4~11)、ここでは異邦人もキリストにあって神の民、新しいイスラエルとされている(イザヤ60:3、ヨハネ10:16、エペソ2:14~19)。旧約のメシア預言に見られたイスラエル中心の神の国ではなく、イスラエルを長子として全人類が招かれている神の国の幻である。

25 都の門は一日中、決して閉じられない 直接には「夜がない」ことが理由であるが、都が諸国民に対して文字通り「開かれている」ことの実現でもある(26、イザヤ60:11参照)。

27 小羊のいのちの書に記されている者たちだけ 全人類が招かれている神の国の広さ(普遍性)と同時に、汚れた者は入れないというその聖さ(排他性)も示されている。終わりの日に全人類・全被造物が救われるという聖書の福音は普遍的な救いのメッセージであるが、普遍救済主義(「信じなくても救われる」)ではない。黙示録が繰り返す、この世との妥協や背教を戒めていることも思い合わせる必要がある。

22・1~2 いのちの水の川、いのちの木 エゼキエル47章の預言の成就であるが、創世記2章のエデンの園の

回復というメッセージも強調されている。新天地・新しいエルサレムは最初の状態への復帰ではなく、さらに良い天地への更新である。

2 諸国の民を癒した いのちの木の祝福が全ての人に開かれていることを示す。民族による差別のない、キリストにある真の平和の確立である。

3~4 神に仕え、御顔を仰ぎ見る 新共同訳と聖書協会共同訳は前半を「神を礼拝し」と訳す。神の民は神との隔てのない交わり(礼拝)に招かれている。

5 彼らは世々限りなく王として治める キリストの王国の民とされた人々は、その王権の地上における代理者として生きる。創造における「地の支配」(創世記1:26)という人間本来の使命の回復である。

参考図書 岡山英雄『小羊の王国』、同『ヨハネ黙示録注解』、R. ボウカム『ヨハネ黙示録の神学』、L. モリス(ティンデル)、G. E. ラッド『終末論』、G. E. Ladd, *A Commentary on The Revelation of John*, G. K. Beale (New International Greek Testament Commentary), G. R. Osborne (Baker Exegetical Commentary), D. E. Aune (Word)。

聖書

ルカ9・21〜27

タイトル

十字架を負って従う

暗唱聖句

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。

ルカ9・23

目標

十字架に向かって歩まれたキリストを覚え、十字架を負い、従う。

導入

(土屋開夫)

皆さん、「桃太郎」の話はよく知っていますでしょう？
桃太郎についていった動物はなんでしたか？ そう犬、猿、キジですね。彼らを連れて鬼ヶ島に向かい、見事、鬼を退治しました。

では今度は本当の話。私たちは誰についていけばいいのでしょうか？ そうイエス様です！ イエス様と共に罪と悪魔と戦うのです！ そしてイエス様はきびだんごよりもはるかに素晴らしい「永遠のいのち」をくださいます！

イエス様についてくのは楽しい？ 苦しむ？

ところでイエス様は「わたしについてきなさい」とか「わたしに従ってきなさい」と、よく言われましたが、みんなはイエス様についていくのは楽しいと思いますか？ それとも苦しいと思いますか？

たぶん、どっちもあると思います。お弟子さんたちがイエス様についていく時も、楽しい時と苦しい時と両方あったと思います。例えば、イエス様が結婚式で水をぶどう酒に変えられたり、五つのパンと2匹の魚で大勢の人々をお腹いっぱいにさせたり、また病氣の人を癒やしてあげて、人々が「この方のなさった事は、何もかも、すばらしい」と褒めたたえた時、そんな時はイエス様についていく事が嬉しくて、楽しくて、「私はこのイエス様の弟子なんだぞ」と誇らしく言いたくなったでしょう。けれども、イエス様についていくという事は苦しい事もある事をイエス様は話されました。

十字架の苦しみを予告される

イエス様はお弟子さんたちに、やがてご自分が必ず多くの苦しみを受け、人々から捨てられ、そして遂に殺され（十字架）、そして三日目によみがえる事を予告されま

した。最後に素晴らしい復活があるのですが、そこまでに多くの苦しみを通らなければなりません。そんな人々から苦しめられたりするイエス様についていくのはとても大変で辛い事だと思います。

イエス様の人々から愛され、喜ばれ、歓迎され、人気がある時、イエス様についていく事は楽しいでしょう。でもイエス様の人々から憎まれ、バカにされ、悪口を言われ、人々が離れ去っていく時、そのイエス様についていく事は苦しい事でしょう。

例えば、学校のクラスでお友達が、「この前、教会のクリスマス会に行ったらスゴク楽しかったぜ。プレゼントももらったし」「いいなあ、オレもいけば良かった」と話していたら、「ボク、実は毎週、教会に行ってるんだ。イエス様を信じてるんだ」って言えるかも知れません。でも、「なんか教会学校とか行ってるやつってキモイよな」なんて話したら、それでも「ボク、実はイエス様を信じてるんだ」って言えますか？

ある牧師先生の話

牧師というお仕事は嬉しい事もたくさんあります。誰かがイエス様を信じた時は一番嬉しいのです。でも辛い

時もあります。人から悪口を言われる時もあるのです。ある時、T先生はとても辛い事があって、牧師を辞めたと思います。そんな時、「パッション」というイエス様の映画を観に行きました。そしてイエス様がとても苦しそうに十字架に架かっておられる場面を観ながら、イエス様にこう言われている気がしたそうです。「わたしはあなたのために、この十字架に架かった。これはわたしにしか負えない十字架だ。これをあなたが負う必要はない。でもあなたが負うべき十字架がある。あなたの十字架は何か？」そうしてT先生は、牧師を辞めないで、もう一度イエス様についていく決心をしたそうです。

まとめ

「自分の十字架」というのは、イエス様が与えられるあなたの役割、使命の事です。それが何なのか、祈りながらゆっくり考えてみましょう。そしてイエス様に日々ついていきましよう！ 苦しい時もあるでしょう。でも、苦しみの後には喜びが、寒い冬の後には温かい春が、十字架の後には復活があるんですよ！

♪歩こうイエスの道を♪ (PW15、イン81)

聖書 ルカ9・21〜27
テーマ 十字架を負って従う

序論

(石田高保)

人は自分の最期を予想することはできません。しかし主はそれができました。イエス様が神の子であり、ご自分に対する神の計画が見えていたからです。十字架にはりつけになって死ぬことと、復活することは神より啓示されてきました。主の十字架と人間の十字架では次元は違いますが、《手放さないと失い、手放すと得る》という原則は同じです。

一、手放さないことの損失

イエス様は弟子たちに言われました、(人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によりみがえらなければならぬ)。私たちはイエス様自身がどんな死に方をするかを正確に預言していることを見逃すわけにはいきません。誰でもできるだけ楽な死に方をしたと考えます。それなのに主は他人ごとのようにご自分の最期について語っています。つまり主は人類の罪を負って死ぬことを

神からの使命として織り込んでいたということになります。イエス様はまことに神から遣わされた神の子です。私たちが人間の罪を贖うためにご自分から十字架につく道を選択しました。さらに死に方だけではなく、三日目に甦ると正確な日数を挙げて預言していることも見逃せません。しかし弟子たちにとって死の預言はとうてい受け止めがたかったので、復活という希望に満ちた預言は耳に入らなかつたでしょう。甦ることによって信じる者に永遠の命を約束されたにもかかわらずです。これによって主は復活することを明確に予知しておられたことがわかります。

〈だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい〉。主はご自分が十字架で死ぬことと、私たちの負うべき十字架をダブらせているということ、神からの使命について語っていることになりました。つまりクリスマスチャンの使命とは、自分の十字架を選び取ることです。それはひとこと言えば「自分を与える生き方」でしょう。これは無理強いされるものではありません。負わぬ自由も与えられています。生まれながらの人間は、人

からも神からも何かを得よう得ようとしません。それだけでは神の望まれる生き方ではないでしょう。神は私たちが「あなたがたのうちキリストが形造られる」ことを願っておられます（ガラテヤ4・19）。神様の私たちへの評価と期待は高いのです。この与える生き方をはばもうとする誘惑は日常的にあります。たとえば損得勘定^{だんてきょう}に負けて自分を守りたくありません。《へぼ将棋、王より飛車を可愛がり》というように、神様より自分の都合を大事にしてしまうこともあるでしょう。さてあなたに手放せないでいるものが何かあるでしょうか。

二、手放すことの利益

〈自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです〉。内村鑑三がクリスチャンの事業家の相談に対してこう言ったそうです。「桶の水を手前にかき込もうとすると水は向こうへ逃げてゆく。しかし水に向こうへやろうとするとかえって手前にやってくる」。損して得を取れというようなことでしょうか。イエス様の最期はまさにこのとおりで、十字架にかかってご自分の命を差し出しましたが、三日目には甦っています。まさに自分の命を失いな

がら命を得た生き方を表しています。

〈人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の益があるでしょうか〉。損得勘定が働くこと自体は悪いわけではありませんが、最後は損得を超えて自分の十字架を負う、つまり与える生き方を選ぶことは、回りまわって私たちの得になります。情けは人の為ならずと言います。良きサマリア人のたとえでも、祭司やレビ人は半死の旅人に関わったら自分はどんな利益があるかを考えましたが、サマリア人はこの旅人に関わらなければこの人はどんな不利益を受けるかを考えました（ルーサー・キング牧師）。このみことばはフランシスコ・ザビエルが修道士として生涯をささげるきっかけとなったものと言われます。彼はナバラ王国の貴族でしたが、パリ大学に留学中、イグナチオ・デ・ロヨラの影響を受け、富貴な生活を送ることよりも、神に身をささげて福音を伝えることを選んだということです。

結論

さて私たちにとって〈自分を捨て、日々自分の十字架を負って〉イエス様に従うとはどんなことでしょうか。身の周りの人のために貢献できることは何でしょうか。

研究資料

(宮澤清志)

この箇所は、通常18節からの流れの中で語られる箇所である。様々な注解書を開いてみても、この箇所はそのような流れの中で語られていることのほうが多い。しかし、本日のテーマが「十字架を負って従う」というテーマであり、目標が「十字架に向かって歩まれたキリストを覚え、十字架を負い、従う」ということから、21節からの箇所が開かれているのであろう。教会学校での説教時間が限られていることから考えても、十字架に徹する説教を心がけたいものである。

なお、この箇所は、マタイ16・13～19、マルコ8・27～29にも並行記事として記述がある。この並行記事にもよく注意して当たっていただきたい。

テキスト

21 このこと 前節までの「ペテロの信仰告白」によって示されたイエスのメシア観。だれにも話さないようにイエスはなぜこのように自分がキリストであることを固く口止めされたのであろうか。実は、この告白は、ペテロが自らの意志でした告白ではなく、神ご自身がペテロ

の口を通してさせた告白であり(10・22、マタイ16・17参照)、神が選んだ人々にのみわかる告白である。従って、他の人々にはこの告白の真の意図はわからないものであるから、イエスはこの告白を誰にも話さないようにと命じているのである。マタイの記事では、この告白をしたペテロ自身も、この告白の真の意味は理解できていなかったようである(マタイ16・22～23)。

22 人の子は多くの苦しみを受け… この部分は「なければならぬ」と結ばれている。それが神の計画であることを指し示している表現である。「人の子」が、「受難のしもべ」(イザヤ53章)と結びついて語られているところに、イエスのメシア理解の特徴がある。「神のキリスト」(20)は、まず受難のしもべでなければならなかったのである。長老・祭司長・律法学者 ユダヤ教の最高議会であるサンヘドリンの議会のこと。

23 皆に 弟子たちだけに向けて語られたのではなく、五千人の群衆に向けられたものでもあろう(14)。ついて来たい とは、一時的にはなく、永続的な従い方を求めたものであり、それは時間的な長さだけでなく、「日々」(この言葉はルカのみが用いている言葉である)

という言葉にみられるように、日常生活における瞬間性、あるいは具体性をも伴った意味を持つ。**自分を捨て**ただキリストだけを知って、もはや自分自身を知らないということである。自分の財産、野心、愛着、利害その他自らの一切のことをキリストの脇へ置くことである。**日々自分の十字架を負って** 十字架のくびきを負うこと(マタイ11・29)。イエスの教えを行う際の自己放棄を求めた言葉。**わたしに従って来なさい** わたしに従い続けなさい、という意。なお、この3つの命令「自分を捨て」「自分の十字架を負うて」「わたしに従う」ということは、それぞれ別の命令ではなく、弟子としての生き方であり、全き献身と同時に、神の御心への日々の服従を求める言葉である。

にいたる道と死に至る道とを示しておられるのである。**失う：救う** 神の裁きの時、神に受け入れられるか神に退けられるかという、終末的な意味合いを持つ言葉。

25 前節の「自分のいのち」が、ここでは「自分自身」と言い換えられている。前節の視野がさらに広げられて、ここでは「全世界を手に入れる」とある。全世界と、その中のすべてのものを得るのは一時的には得のようであるが、それによって神から遠ざかり、最後には永遠のいのちを失う(損する) ことになれば意味がないのである。

26 恥じる 恥じて否認すること。この世におけるイエスとその言葉とに対する態度が、終末における「人の子」(イエス)の態度を決するのである。

27 この言葉の聴衆は弟子たちや群衆たちである(23)。ここに立っている人たちは、聴衆である弟子たちや群衆たちであり、実際、**死を味わわない人たち**とは、イエスとその言葉を恥じずに日々十字架を負ってきた弟子たちということになる。味わう 深く体験すること。

参考図書 A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament II (BROADMAN) 他

聖書

ルカ9・28〜36

タイトル

イエス様について行こう！

暗唱聖句

これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。

(35)

目 標

栄光の主が十字架に向かって歩まれたことを覚え、従う。

導入

(飯田勝彦)

今、皆さんの仲良しの友だちを思い浮かべてください。その友だちの住んでいる所、得意なこと、好きな食べ物、性格などいろいろ知っていますでしょう。では、皆さんにとってイエス様はどんな方ですか？ 幾つか挙げてみましょう。今日の個所は、イエス様がどんな方が分かる出来事が起こりました。とても不思議な出来事です。

祈りに招かれるイエス様

イエス様は弟子のペテロとヨハネとヤコブを連れて山に登られました。それは祈るためです。この時、弟子の三人はどんな気持ちだったでしょうか。28節に「これらのことを教えてから八日ほどして」とあります。「これらのこと」とは何のことでしょうか？ そうです。先週

聞いたことです。「イエス様は弟子たちにご自分が多くの苦しみを受けて、長老たちや祭司長たち、さらには律法学者たちに見捨てられ、殺され、三日目によみがえされる」という内容でした。

大切な友だちが「もう長くは生きられないんだ」と言ったら、皆さんどんな思いになりますか？ 「えっ、どうして！ どこか病気のなの？」ってびっくりして悲しくなりますよね。

イエス様を救い主と信じ、イスラエルの国を再建してくださると期待していた弟子たちにとって、イエス様の話はどのように聞こえたでしょう。山に登るまでの八日間、彼らの頭の中は「イエス様の死とよみがえり？ えっ、どういうこと。これから何が起こるの？」と、クエスチョンマークと不安でいっぱいだったはずですよ。

そんな弟子たちをイエス様は祈りへと招かれたのです。今もイエス様は皆さんを祈りに招いて下さっています。私たちの頭の中は弟子たちのように不安なことがいっぱいあるかも知れません。でも、イエス様はそのことをよくご存知です。そして、祈りの中でご自身の側に引き寄せてくださるのです。

ご自身を現わされるイエス様

山に登った弟子たちは、ここで忘れることのできない光景を目の当たりにします。祈っていたイエス様の御顔の様子が変わりました。どのように変わったのでしょうか？ 穏やかで平安に満たされた顔でしょうか。それとも、近寄りたいたい厳しい顔でしょうか？

変わったのは御顔だけではありませんでした。イエス様が着ておられた衣が白く輝いたのです。太陽の光が当たって輝いたのではありません。衣が輝きました。

皆さんは蝶のさなぎが、蝶に変わる様子を見たことがありますか？ 何だかいびつな形をして綺麗とは言えないさなぎから、とても美しい蝶が出てくるのを見ると非常に不思議ですし、神秘的です。こんな美しいものがこのさなぎの中にあつたのかと感動します。

イエス様は聖なる方で神の栄光の輝きをお持ちの方です。まさに光輝いていらっしゃる方が、私たちと同じ人間となつてくださいました。それがクリスマスに起こったことです。でも、この場面は神の子イエス様の姿が人間の枠を超えて現わされたのです。弟子たちにとっては、これまで見たことのない輝きであつたと思います。このイ

エス様の輝きがやがて私たちの辿り着く天の都の明かりとなるのです（黙示録21・22～23）。

弟子たちは、私たちが思い描く以上のイエス様本来の姿を見せられたのです。

私たちが従うのはイエス様

弟子たちが戸惑っているとき天から声がします。「これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け」（35）と。目の前に現れたモーセやエリヤはいなくなり弟子たちの前にはイエス様だけがおられました。神様は、十字架と復活の話題に不安を抱えていた弟子たちを励ますかのよう「イエスに従いなさい」とハッキリと語られたのです。これは今朝、私たちにも同じように語られます。

山の上の体験を通してイエス様に対する弟子たちの見方はどう変わったでしょうか？

まとめ

イエス様は栄光に輝く御子であられるのに私たちを救うために十字架の道を歩まれました。イエス様は私たちに幸せに導かれる唯一のお方です。これからもイエス様に信頼しイエス様に従って行きましょう。

♪主はすばらしい♪（ホ135、イン11、PW29）

聖書 ルカ9・28～36 テーマ 変貌のキリスト

序論

(石田高保)

聖書は、イエス様にあらゆる角度から照明を当て、安心して人生をイエス様に任せられるようにします。

一、イエスを知る

私たちにとってイエス様とはどういうお方でしょうか。ペテロは「神のキリストです」(20)と告白しています。つまりただ一人のまことの神ですと。主はご自分から進んで十字架にかかり、死ぬことによって、私たちの罪を贖って下さいました。まったく罪も汚れもない人となられた神だからこそ、私たちの罪を取り除くことができます。イエス様はペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて高い山に登りました。弟子たちは三年半、イエス様と一緒に生活してきましたが、今までにない神々しい姿に変貌するのを見て、腰を抜かしたでしょう。神への畏れが生じたに違いありません。これはイエス様の本性が神であることを明らかにしています。イエス様が人間として生まれてきたことは間違いありません。主は聖

霊によって身ごもりましたが、生まれてからは普通の人間として生きました。30才で神の国を宣べ伝えるようになってからは、著しい奇跡によってご自分が神であることを表しました。しかしこの出来事のように、変貌した姿を見せたことはこれまでありませんでした。

なぜイエス様はこの時ばかりは神としての変貌した姿を弟子たちに見せたのでしょうか。しかもこの出来事を長く秘密にさせました。それは私たちが個人的、体験的にイエス様を唯一まことの神として受け入れるためではないでしょうか。西郷隆盛は人から書を頼まれると、よく「敬天愛人」と書いたそうです。天が二つとないように、神もお一人だけであり、それはイエスその人であることを体験的に知りましょう。そのために福音書に記されたイエス様の言葉と行動が私たちの生活に深く関わっていることを発見しましょう。

これを見た弟子たちには終生忘れえぬ経験となり、弟子たちの信仰を強めました。「私たちは、キリストの威光の目撃者：私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました」(Ⅱペテロ1・16～18)、ペテロはイエスの変貌する姿をこの目で

見ましたが、私たちも聖書を読んだり、説教を聞いたり、みことばを分かち合ったりするとき、神の言葉を聞き、イエス様の姿を信仰の目で見る事ができます。私たちにとって栄光のイエス様を見るとは、突き詰めれば主をいつも目の前に置くことです。それは心をかき乱す思いや出来事に目を奪われるのではなく、主を目の前に凝視することです。天から声がして〈彼の言うことを聞け〉と言われたように、損得勘定で頭が一杯になってしまつたとき、主に尋ねることです。みことばそのものと聖書の価値観で物事を判断し、従ってゆくことです。

二、イエスを見る

私たちはこの世にしながら、神の国に生きています。どちらが確かでしょうか。言うまでもなく目に見えない神の国です。目に見えるこの世界は、何の努力をしなくても見ることができません。しかし目に見えない神の国は、意識的に目を注ぐという努力が要ります。栄光に輝くイエス様を見るとは、何か神秘的な体験というのではなく、主を目の前に置き続けるという営みです。ふと気がつけばイエス様と会話している自分を発見する、そういう世界です。

〈二人の人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤで〉、どんなことを語り合っていたのか、〈イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について〉、つまり十字架の死です。モーセは律法の代表、エリヤは預言の代表、つまり旧約聖書全体は人類の救いを完成するキリストの死に全神経を集中しているわけです。二人はイエス様にこう言ったかもしれませぬ。「主よ、神の子であるあなたのほかに十字架にかかつて救いの道を開くことのできる方はいらっしゃいませぬ」と。

またペテロはこの山で聞いた神の声を、その手紙の中でも書いています。〈これはわたしの選んだ子〉、この言葉は主が間違はなく神の子であることにお墨付きを与えています。私たちはふつう自分に語りかけられた言葉とは考えないでしょう。確かに第一義的には、イエス様にかけられたお言葉です。しかし第二義的には、私たちに語りかけられていることを受け取ってよいのです。

結論

キリストの血潮のゆえに罪ゆるされ、神と和解し、神の子とされた人は、神の目には愛する子であり、その存在が無条件に受け入れられていることを感謝しましょう。

研究資料

(宮澤清志)

いわゆる「変貌山のキリスト」といわれる出来事である。この出来事は、キリストの生涯の中でもクライマックスの出来事の一つである。共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ福音書）すべてにこの出来事が記されていることからわかる（並行記事としては、マタイ）。しかしルカは様々な点において他の福音書とは異なる書き方をしている。説教のためには、他の福音書の並行記事とルカの表現を比較しつつ、ルカの意図を考察してみるのも参考になる。なお、並行記事としては、マタイ17・1〜9、マルコ9・2〜10にある。

テキスト

28 これらのことを教えてから 先週見たイエスの十字架と復活の預言が、変貌の出来事と関連して語られる。八日ほどして 彼の福音書では六日となっているが、どちらも先週の出来事から一週間後の出来事ということであろう。**祈るために** ルカのみが記録する言葉。ルカにとって、この出来事はイエスの祈りの結果なのである。

山 ルカにとって、山とは特別な場所である。特に、ルカにおいて、山は啓示の場であった。

29 イエスの変容の場面。ここでも、イエスの姿変わり
は祈りと結びついて語られる。

30 モーセとエリヤ この2人は、それぞれ律法と預言者の代表として登場する。それはすなわち旧約全体の代表者として紹介されているのである。

31 イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期
について 最期とは、ギリシャ語で「エクソダス」。この言葉は第一義的には「出発」「出立」「旅立ち」を意味する。しかし、このことは、旧約の「出エジプト」の踏み直しという意味を持つ。具体的には、死への旅立ちを通しての復活と天への旅立ち―十字架、復活、そして昇天―ということになる。そしてそれは、「遂げようとしておられる」すなわち旧約においてあらかじめ表された神のご計画の成就ということも意味する。

32 ペテロと仲間たちは眠くてたまらなかった この記述もルカにしかない。「ひどく眠かった」(新共同訳)、とあるように、ここで彼らは眠気をじっとこらえていたようである。その結果、主の栄光を見ることができたので

ある。ここでも「目を覚ます」ことの重要性が語られる。**イエスの栄光** ルカでは、イエスの変貌の様子はあまり触れていない(参照 マタイ17・2、マルコ9・3)。

33 幕屋 神の住まいとしての幕屋をさす。特に、聖書においては聖所という意味をもち、神の顕現の場、礼拝の場を指す。しかしこの時、ペテロは2つの誤りを犯している。それは、イエスの独自性を忘れてモーセやエリヤと同列に取り扱ってしまったことであり、もう一つはこの幕屋にとどまることによって、下山せずに栄光のうちにとどまることをイエスに求めたことである。

34 雲 神顕現を暗示する言葉であると同時に、神の栄光のしるしでもある(出エジプト24・15〜18、40・34〜35)。**彼らをおおった** この「彼ら」が、モーセとエリヤを指すのか、あるいはペテロ、ヨハネ、ヤコブを指すのかは、様々な解釈がある。

35 これはわたしの選んだ子 この言葉は詩篇2・7に由来する言葉である。この言葉はイエスの受洗の時にも語られた言葉であるが(3・22)、イエスがメシヤであることを示している。**選んだ** この言葉はイザヤ42・1に由来する言葉である。イザヤ42章は、イザヤ書の「4つ

のしもべのうた」といわれる個所の一つである。特にこの個所は「苦難のしもべ」を示す言葉である。主イエスの受洗の時にも天からの言葉は語られているが、両者では語りかける対象が異なる。イエスの受洗の物語では「あなたは」とあり、語られた対象はイエス本人であった。一方この個所では「これ」とあることから、天からの声は弟子たちに対する語りかけである。弟子たちに、イエスがどのようなお方であるかを告知されたのである。先週ペテロを通して語られたイエスへの信仰告白(9・20)の、天からの確認の言葉である。**彼の言うことを聞け** 33節において犯したペテロの誤りに対する、天の声の修正の言葉。苦難を経て、栄光に入るイエス・キリストに従うようにという言葉である。

36 マタイもマルコも、弟子たちの沈黙はイエスからの命令であった(マタイ17・9、マルコ9・9)。しかしルカは、この出来事に対する弟子たちの沈黙は、弟子たち自身の判断であったと記す。弟子たちの主イエスに対する無理解の故であるかもしれない。

参考図書 1月30日分と同じ。

聖書 ルカ11・1〜13

タイトル 熱心に求める

暗唱聖句 求めなさい。そうすれば与えられます。

ルカ11・9

目標 切なる求めをもって祈る。

主の祈り

(櫻井めぐみ)

日曜日の礼拝では、主の祈りをみんなでささげます。主の祈りは、イエス様ご自身が「こう祈りなさい」と教えられた完全な祈りであり、祈りの模範です。主の祈りの言葉には、私たちが祈るべきことがすべて示されています。これは日曜日だけでなく、毎日の生活の中で、一人の時にも祈ることができます。みんなが祈る時に、どう祈ったらいいかわからないと思っても、主の祈りを心から祈るなら、必要なことはすべて祈ったということができます。イエス様が教えてくださった「主の祈り」を、みんなもぜひ毎日祈ってみてください。

真夜中の友人のたとえ

次にイエス様は、神様に祈る時の求め方について一つひとつのたとえ話をなさいました。友人が突然やって来て、パ

ンを貸してくれってしつこく頼む話です。それは真夜中のことでした。いくら友だちだからといってパンを貸してくれなんてふつうは言えるかというと、なかなかできないと思います。でも、その常識はずれなことを彼はやってのけました。彼らは、それが許されるほどの親しい関係だったからです。しかし頼まれた友人は、やっぱり面倒くさいものです。でも一度断っても、頼みに行ったら人はあきらめませんでした。迷惑かけるからやめよう、とは思わなかったんです。だって、どうしてもそれが必要だから。そして、彼はこの友人に求め、叫び、せがみ続けました。とつくに寝ていた友人はついにこう思ったでしょう。「これではとても眠れない。起きてパンをあげた方がよさそうだ」。そしてこの人は、結局そうすることになるのです。でもそれは、求めた人がしつこかったからなのです。確かに二人は、多少の無礼は大目に見てもらえる関係だったかもしれない。でも願いを聞いてあげたのは、その人のためというよりは、彼があまりにもしつこかったからなのです。

求めなさい

だから、私たちも言われているのです。「求めなさい」。

そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。」でもこれはただ祈りさえすれば自動的に何でも与えられるという意味ではありません。それではまるで神様の恵みを、お金を入るとジュースが出てくる自動販売機と同じレベルにしてしまうことになります。第一、そのような祈りには、神様との真の交わりがありません。神様は、私たちとの真剣な対話を求めておられるのです。そして真剣な求めとは、返答をもらうまで決して満足しないものです。普通はしつこい、つていう言葉は良いイメージを持たれていないと思います。しかしイエス様はたとえ話の中で、みんなが神様に対してしつこくあることがいかに重要かを語っておられるのです。

天の父は聖霊を与えてくださる

ただ、みんなが願う求める相手は、仲良しグループの友だちではなく天のお父様です。みんなはその神様の子どもです。だからこそ、「ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父は自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」と言

われているのです。しかし、なぜ「聖霊」なのでしょう？ 要するに、天のお父様が祈りに答えて与えてくださるもつとも良い物とは、「聖霊」なのです。もちろん、魚をくださいと祈ってもいいのです。卵をくださいと祈ってもいいのです。神様は、みんなの祈りに必ず応えてくださいます。ただし、それはすぐに聞かれるとは限りません。そしてまた、みんなの期待どおりの方法で答えられなくとも限らないのです。でも、たとえ祈りがすぐに聞かれなくても、熱心に求め続けるのです。時にはもう信じられなくて、祈りをやめなくなる時がくるかもしれませんが、でも、後になつてから必ずわかります。自分が願ったもの以上に、もつとすばらしい形で祈りが応えられた時。その時みんなは、与えられたものがどんなにすばらしい贈り物であるかを知り、また神様がどんなに自分を愛して下さっているかを知ることになるのです。それが、「聖霊を与えてくださる」ことの意味です。

♪祈つてごらんよわかるから♪（新聖歌481他）

聖書 ルカ11・1～13 テーマ 熱心に求める

序論

(福井文彦)

最初弟子たちは、イエスの素晴らしい説教とみわざだけが覚えていました。ところが、ずっと一緒に生活しているうちに、イエスのもう一つの姿が見えてきました。それはイエスの祈る姿です。そして、実は、イエスの大きなみわざはこの祈りに支えられていることを知ったのです。それで弟子の一人が、〈主よ、私たちにも祈りを教えてください〉と願い出ました。そのときイエスは切に祈ることを教えられたのです。

一、模範的な祈り

そこで、イエスは弟子たちに模範的な祈りを教えられました。それが2～4節です。それは五つの嘆願からなるとても短いもので、同時に、個人の基本的必要をすべてカバーしています。その内容は①〈御名が聖なるものとされますように〉。これは、「神の聖なる御名が礼拝され、賛美されるように」という祈りです。②〈御国が来ますように〉。これは、「神の国、すなわち神の支配が実

現し、神だけが全世界の王となつてくださるように」という嘆願です。

続く3～4節は、クリスチャンが2節の二つの祈りを実践するうえで必要を求めた祈りです。③〈私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください〉。これは、「私たちの霊肉に必要な、欠くことのできないものを日々お与えください」との祈りです。④〈私たちの罪をお赦しください〉。私たちは私たちに負い目のある者をみな赦します。これは、心のありのままを申し上げて罪の赦しを乞う祈りです。⑤〈私たちを試みにあわせなさい〉。これは、「私を罪の力、犯罪の力、誘惑の力に会わせなさい」との祈りです。主のこの教えのように私たちも祈ることです。

二、しきりに願う

そこでイエスは一つのたとえを話されました。ある人に夜中に友だちが訪ねてきました。中近東は、昼は暑いために夜になつてから移動をするので、夜中に家に着くことがあるようです。その友は空腹でしたが、家には何もありませんでした。そこで、真夜中に近くの友人の門をたたいて、パンを三つ分けてくれるように頼むのです。

当時の庶民は、キルティングのようなものを、土の床に置いて、全家族がその上で寝て、大きな毛布で全員をおおうものでした。このとき、友人は、子どもたちと共にすでに寝ていましたから、もし彼がパンを探し、分けあげると寝て起き上がると、全家族をわずらわすことになります。そこで彼は断りました。それは無理からぬことでした。

ところがイエスは言われたのです。「この人は、友だちだからというだけでは、起きて何かをあげることはしないでしよう。しかし、友だちのしつこさのゆえなら起き上がり、必要なものを何でもあげるでしよう」。ここで、イエスは祈りこそ神の恵みを受ける手段であり、「しきりに（しつこく）願う」忍耐強い祈り、祈りにおける根気強さの必要を教えられたのです。

三、神は祈りを聞いてくださる

5～8節のたとえは、神を根負けさせるような激しい祈りの勧めと誤解されることがあります。しかし、ここで教えられていることは、神が祈りを聞いてくださることの確かさです。そのことはこのたとえの教訓として教えておられる9～10節から明らかです。

イエスは〈求め〉ても、答えが得られなければ、もつと熱心になって〈探〉すべきである。それでもなお、答えが来なかったならば、結果を得るまで、死に物狂いで〈たたきなさい〉、そうすれば希望がかなえられる、と教えられました。友人関係を土台にして、「しきりに願う」のでパンが与えられます。ましてや私たちが神を父と呼ぶ父子関係を土台にして「しきりに願う」（しつこく願う）なら、神は忍耐深い祈りに心を動かしてください、聞いてくださるのです。

このような祈りに対する神の恵みの確かさは、11～13節のもう一つのたとえで一層明確に教えられています。人間の父親であっても、子どもに良い物を与えるとすれば、まして、天の父は、求めて来る者に、人間の父よりもはるかに良い物（聖霊）をくださらないはずはないのです。

結論

イエスは、弟子たちに模範的な祈りを教え、神がいつも祈りに答える用意があり、また必ず答えてくださることを保証することによって、彼らに祈り続けるようにと励まされたのです。

研究資料

(宮澤清志)

テキストト

2〜4 主の祈り

並行記事としてマタイ6・9〜13の主の祈りの記事がある。マタイの並行記事にもよく目を通しておくことが望ましい。

2 父よ 直訳すれば「お父ちゃん」という呼びかけである。ここに見られる祈りは、父なる神に、家族的親密さをもつて近づくことのできる特権をクリスチャンは与えていることを示す。**聖なるものと**(ギ)ハギアゾー)聖とされる、という意味の言葉。神への奉仕のために世俗のものから引き離すことを意味する。**御国** 神の恵みの支配。空間的領域的なものではなく、関係的概念である。

3 毎日お与えください この祈りは、「毎日与え続けてください」と理解できる。

4 罪 マタイの主の祈りでは「負い目」となっている。ルカはこの福音書を異邦人向けに書いたのであって、ルカの心中には、おそらく異邦人には罪という言葉の方が

身近であると感じたのではないかと考えられる。私たちが**を試みに**：一般的に、罪を犯す危険を伴った誘惑のある状況についての嘆願と解釈すべきである。

5〜8 真夜中の友人のたとえ この箇所はルカ独自の記事であり、祈りについてのルカの3つのたとえ話の一つ(他の二つは18・1〜14)である。

5 **あなたがたのうちのだれかに** この中の「だれか」は、原文では疑問文であり、「あなたがたのうちで、だれか」と訳すことができる文である。当然、その答えとしては「誰もいない」という否定的なニュアンスを持つことを前提としている。すなわち、このたとえ話の主人公は、私たちの想像を超える強引な求め方をしているのである。**パンを三つ貸してくれないか** 「パンを三つ」とは、ひとりが食する一日分の分量。また「貸す」とは、商取引上の、いわゆる「利子を付けて貸す」(6・34)とは異なり、友情における貸し借りのことである。

6 パレスチナでは、日中の暑さを避けるために、夕方から旅を始めることはごく普通のことであったようである。また、村人の生活は、どの家庭にどのくらいパンが残っているかを知っているほどの近所づきあいの中で生

活をしていた。

7 この家人は、パンの貸し借りそのものを否定しているのではない。当時の戸はかんぬきで締められており、そのかんぬきをはずすことは大変だったろうと思われる。またかんぬきを外す音によって同じ部屋に寝ていたであろう子どもたちが起きてしまうことも危惧された。しかし、友人は、それを承知の上で夜中にやってくる。この両者の信頼関係がこの物語の背後にはあるのである。

8 しつこさ 原語では「厚かましく」「恥知らずに」という意味を持つ。この友人は、願うことにおいては厚かましかったのである。彼の隣人は、この友人が、友人であるという事でパンを貸したのではなく、彼の厚かましさ、図々しさに根負けしたのである。

9〜13 次に続く箇所は、これまでの真理をさらに展開する。この箇所は、三つの格言(求めよ、探せ、門をたたく)と二つの問いとからなる。これらの問いは、父親の我が子に対する優しさを、父なる神の、更により大きな恵みと対比する。そして、「それならなおのこと、天の父は」(13)とどう結論へと達する。なお、この箇所は、並行記事としてマタイ7・7〜11がある。ここも参照し

て頂きたい。

9 求めなさい この言葉はしばしば祈りの文脈の中で用いられている(マタイ18・19、マルコ11・24、ヨハネ11・22他)。探しなさい この言葉は、しばしば神とその救いとを求める文脈の中で用いられている。またそれらは祈りへと導かれるものである。たたきなさい ラビ文書においては、通常祈りの暗喩的表現として用いられていた。

11〜12 この箇所はマタイ7・9〜10に並行記事が登場するが、相違点もある。しかし、いずれにしても、両者の話の論旨に影響はない。

13 この箇所にはもう一つ、マタイとの相違がある。それはルカでは 聖霊 と書かれてある箇所が、マタイでは「良いもの」と訳されていることである(11)。ここでは聖霊とは、祈りがきかれて与えられる賜物としての聖霊である。

参考図書 A・M・ハンター「イエスの譬えの意味」(新教出版社)。A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II. The Gospel According to Luke (Broadman) 他

聖書 ルカ16・19〜31
金持ちとラザロ

タイトル 彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい。 ルカ16・29

暗唱聖句 死後のさばきの存在を知り、み言葉によつて備える者となる。

正反対の二人

(櫻井めぐみ)

今日のたとえ話には、まったく対照的な二人の人物が出てきます。一人は金持ち。この人は、「紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた」とあります。ロイヤルパープルという色がありますが、昔から紫は、高貴な身分の人が身に着ける色だとされています。そして、「柔らかい亜麻布」とは下着のことです。これらを組み合わせる使用するのは、最高のぜいたくだったと言われています。金持ちはそのようなものを着て、毎日遊び暮らしていました。一方、もう一人のラザロはどうだったかという点、貧しい人で、全身ができませんのでおおわれていて、その上、犬がトコトコやってきて、そのでき物をなめていたというんです。絶望的なほどの

貧しさです。このように、二人はまったく正反対でした。片方の人は、ほしいものをすべて持っていた。そしてもう一方は、なんにも持っていなかった。しかしこの二人は、死んだ後の状況までが正反対のものとなりました。金持ちは「よみ」において、炎の中で苦しみもだえていました。しかしラザロの方は、御使いたちに連れられて、アブラハムの懐かたごころに送られたのです。さて、ここで質問です。金持ちは、なぜ「よみ」にいったんでしょうか？なぜ、天国に行けなかったんでしょう。

金持ちが天国に行けなかったわけ

イエス様は前に、神様の一番大事な教えは何であるかについて、次のように言われていました。「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」また「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」と。イエス様が言われた最も大切な教えは神を愛することであり、そして人を愛することです。私たちのいのちは、神を愛し、神のために生き、そして自分の周囲にいる人たちを愛して生きるものとして神様から与えられたものなんです。ところが死んだお金持ちは、この教えをまったく無視した生活

をしていました。彼は、何か重大な罪を犯したわけでは
ありません。けれども、彼はただ、自分のためだけに生
きた。それが、彼が死んだ後によみに行つた理由です。
では、もう一方のラザロですが、彼はなぜ、天国に行け
たのでしょうか？ 聖書を見ると、あまり具体的なことは
記されていません。しかし、ラザロという名前には「神
は助け」という意味があります。死んだ時に「アブラハ
ムの懐」へ連れて行かれたことから、ラザロには神を
信じる信仰心があつたことは確かです。この「アブラハ
ムの懐」とは特別な表現で、それはもう最高に幸せな状
態のことをさしています。ラザロは死んだ後、そのよう
な待遇を受けることができました。

人は皆、死んだ後にさばきを受ける

聖書には非常に深刻な事実が書かれています。人は
皆、死んだ後に神の前でさばきを受けるといふことです。
もちろん、イエス様が私のために十字架にかかられ
たこと、イエス様を私の救い主として信じるならば、永
遠のいのちが与えられます。そして天国に入り、永遠に
神様と、イエス様を信じた、愛する人たちと一緒に過ご
すことができるのです。それは約束されています。でも

救われた人間には、この世での果たすべき務めがありま
す。イエス様を信じている人も、人生をどのように生き
てきたのが神の前で問われる時が来るのです。イエス
様を信じているなら、この金持ちのように、よみの火炎
の中でもだえ苦しむということはありません。救われた
人だから。イエス様の十字架のみわざは完全なものだか
らです。しかし、永遠のいのちが与えられていても、私
たちはそこにあぐらをかいて、怠けて日々を過ごすわけ
にはいけません。

み言葉に従って生きよう

今日のみ言葉にもあります。「彼らにはモーセと預言
者がいる。その言うことを聞くがよい。」モーセと預言
者とは、聖書のみ言葉のことです。私たちには、神様か
ら与えられた聖書の言葉があります。私たちはイエス様
を信じて、そしてどのように生きたかが問われます。具
体的には、聖書のみ言葉に従って生きることです。たと
え天国に行くことが確実であつたとしても。そのことに
感謝しつつ、神様を愛し、周囲の人たちを愛し仕えて生
きましょう。

♪まもなくかなたの♪(新聖歌45、イン107、PW48他)

聖書 ルカ16・19～31 テーマ 金持ちとラザロ

序論

(福井文彦)

これはルカ福音書だけにある有名なたとえ話ですが、実話であるという人もいます。しかし、それは重要な問題ではなく、イエスが一つの明確な目的をもって語られたということこそが大切なのです。イエスは、①人生はこの世だけでなく死後があること、②この世の生活と死後の生活とは密接な関係があること、を話されたのです。

一、金持ちとラザロ

ある金持ちがいました。彼は、別にこの世の法律を破るようなことをしたのではありません。ただ彼は〈紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた〉のです。紫の衣や柔らかい亜麻布は、金持ちでなければできない服装でした。〈毎日ぜいたくに遊び暮らしていた〉とは、詳訳聖書には「毎日はでにどんちゃん騒ぎをしていた」と訳されています。自分の友だちを呼んで宴会を開き、どんちゃん騒ぎをして、ぜいたくに暮らしていたのです。しかも一日や二日ではなく毎日でした。

ところが一方で、〈その金持ちの門前には、ラザロという、できものだらけの貧しい人が寝ていた。彼は金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた〉のです。彼は食べる物さえろくに与えられず、食卓から落ちる食べくずでようやく命をつないでいました。〈犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた〉のですから、あまりに惨めなラザロでした。ところが金持ちは、ラザロのそんなことはいっこうお構いなしの毎日でした。

二、死後の二人

ある日、貧しいラザロが死にました。おそらく彼はだれにも看取られることなく死んだのでしょう。ところが死んでそれで終わりではなく、〈御使いたちによってアブラハムの懐ふところに連れて行かれた〉のです。ユダヤ人は当時、〈アブラハムの懐〉とは、楽しい、安息の場所と考えていました。彼は、パラダイス(天国)に行つたのです。その後、金持ちも〈死んで葬られ〉ました。おそらくお金がたくさんありますから、華々しい盛大な葬儀だったことでしょう。しかし、彼は〈よみ〉に行つたのです。金持ちがよみで苦しみながら、目をあげると、はるかかなたにアブラハムとラザロが見えました。金持ちはアブ

ラハムに向かつて叫びました。(父アブラハムよ、私をあわれんで…ください。…私はこの炎の中で苦しくてたまりません)と。

しかし、アブラハムの答えは否定的でした。金持ちは、この地上にあつては生涯良い物を受けていたにもかかわらず、富と快楽のために生きました。苦しむ人を見かけながら、何もしないで、自分の事だけを考えることの罪の重さを知らされず。他方、ラザロは生前悲惨な生涯を送りましたが、神をのろつたり不信に陥ることなく生きたのです。それで、(彼はここで慰められ、おまえは苦しみもだえている)と。しかも金持ちとラザロの間には大きな淵があり、よみからパラダイスには移行できないのです。

三、死後の備え

そこで金持ちは自分のことをあきらめました。その代わり地上にいる肉親たちのところにラザロを送つて、自分の二の舞を演じないように警告してほしいと願つたのです。するとアブラハムは(彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい)と答えました。すなわち、地上の肉親には旧約聖書が与えられている。救わ

れるためには聖書に聞くべきであるということです。そこで金持ちは重ねて、ラザロを兄弟のところへ送つて、『死後の世界にはパラダイス(楽しい安息の場所)とよみ(苦しみの場所)がある』と言え、兄弟たちはかならず悔い改めます」と言つて嘆願したのです。しかしアブラハムは、(モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返つても、彼らは聞き入れはしない)と断言したのです。

人間は死んだ後が大事です。神はおいでになるので、「永遠のさばきと苦しみがあ、悔い改めてイエスを信じるなら救われる」ということを勧めても、モーセと預言者(聖書)に耳を傾けない者は、いかに奇蹟を見ても信じないということです。それほど人間は不信仰で、心は頑固なのです。

結論

このたとえ話は、①私たちの生涯は、この世だけで終わるのではない、②死後の世界があり、現在の生活によつて決定される、③聖書のみ言葉に聞き、悔い改めてイエス・キリストを信じるなら救われ、天国に行けること、を教えているのです。

研究資料

(小平德行)

このたとえ話は金銭を好むバリサイ人に対して語られている(ルカ16・14～15)。ユダヤ人には、自分たちはアブラハムの子孫であり、神に選ばれた民族なので、誰でもこの世を去った後には天国に行けるといって考えがあった。しかしバプテスマのヨハネは、たとえアブラハムの子孫でも、悔い改めて、それにふさわしい生活をしていなければ、神の民から切り離されると警告している(ルカ3・8～9)。同様にイエスもここで、この世における行為が、来世における報いに直結する事を語っている。

テキスト

19 紫の衣 非常に高価な染料で染められた服で、上着として用いられた。**柔らかい亜麻布** エジプト亜麻の柔らかい下着。これらはこの金持ちのぜいたくな様子を示す。

20 ラザロ エルアザルの短縮形で「神は私の助け」の意味。彼は貧しさの中でも神に信頼して歩んでいたのであろう。**門** 大きな門か宮殿のポーチ(大きな柱で支えられた屋根付き玄関)を示す。

21 食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと 金持ちは彼に対して無関心であり、自分からは残飯さえも与えていなかった。食卓から落ちるパンくずというのは、当時の習慣からすると、テーブルなどをふき取るためのパンであり、使用した後、テーブルの下に捨ててしまうものをさしているかもしれない。この金持ちは特に重大な罪を犯してきたとは言われていないが、実践すべき隣人愛を怠り、自分のためだけに生きていたことが彼の非難されるべきことであった。**犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた** 犬はユダヤ人には、あたかもネズミやその他の有害な動物であるかのようにみなされていた。彼の惨めな状態を際立たせている。

22 御使いたちによつて…連れて行かれた 金持ちは葬られたが、ラザロは葬られたとは記されていない。その遺体は野良犬のように捨てられたが、ラザロ自身の靈魂は御使いに連れて行かれた。**アブラハムの懐** 天の祝宴におけるアブラハムの隣席のことで、非常に名誉ある場所を意味する。

23 よみ (ギ)ハデース) 新改訳第三版では「ハデス」、新共同訳では「陰府」。これは死後すべての魂が復活の

時までとどまる世界を意味している所もある（使徒2・27）。（ここではむしろ、「死者が終末のさばきを待つ中間状態で置かれる所」（新改訳第三版あとがき）と解釈することができ。ちなみにゲヘナは「神の究極のさばきにより、罪人が入れられる苦しみ場所」（同）をさし、地獄の同意語と考えてよい。金持ちの苦しむ様子から、ここでは「よみ」はゲヘナと同じ意味で用いているようにも思われる。しかし最後の審判において、「よみは火の池（ゲヘナと同意）に投げ込まれた」（黙示録20・13〜15）とあるところから、「よみ」は地獄と関わりはあるが、区別されていると考えられる。

25 **しかし今は、彼はここで慰められ、おまえは苦しむもだえている** 生前と死後とで逆転現象が起きている。金持ちは地上では願うものはほとんど手に入れることができたが、ここでは水の一滴さえ与えられず、苦しみの中にいる。しかしラザロは地上での悲惨な生涯とは裏腹に、死後大いなる慰めを得ている。

26 **大きな淵がある。…渡ろうとしても渡れず** 死後の世界において、定められた場所から移動することはできない。

27〜28 **彼らに警告してください** この金持ちは、もし自分にもこの警告が与えられていたなら、違う行動をとっていたらどうかと考えている。

29 **モーセと預言者** 旧約聖書全体のこと。その言うことを聞くがよい この金持ちのよみでの苦しみは、彼の富のゆえではなく、み言葉を無視し、聞き従わなかったことによる。

31 **だれかが死人の中から生き返っても…聞き入れはしない** 実際に死者の中からよみがえったラザロを見ても、イエスを信じようとしなかった者たちはいた。聖書の言葉を聞いて信じようとしないう者は、たとえ復活などの奇跡を目の当たりにしても信じることはない。

このたとえ話において大切なことは、今この地上で生きている間に、聖書の言葉に聞き従い、富ではなく、主に仕えるべきであるということである。今は恵みの時、救いの日である（Ⅱコリント6・2）。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』（いのちのことば社）・The IVP Bible Background Commentary: NT, Leon Morris Luke (The Tyndale New Testament Commentaries) 他

聖書

ルカ17・11〜19

タイトル
暗唱聖句

イエス様に感謝しよう！

そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かること：イエスの足もとにひれ伏して感謝した。

ルカ17・15、16

目標

主から受けた恵みに感謝し、神をほめたたえる。

導入

(和田牧子)

皆さんは「ありがとう」とお友だちに言われるとうれしいですよ。どんな時に「ありがとう」と言われますか？ 逆に、どんな時に「ありがとう」と言いますか？ 誰かが何かをしてくれて、うれしい時に言いますね。イエス様もまた、皆さんの「ありがとうございます！」という心からの感謝をとっても喜んでくださいますよ。

病気の苦しみ

イエス様がエルサレムに向かう旅の途中で、サマリアとガリラヤという町の境を通られました。サマリアにはサマリア人が住んでおり、ガリラヤにはユダヤ人が住んでいました。サマリア人とユダヤ人はお互いに仲が悪

く、敵同士と思っていました。

ある村に入ると、ツアラアトという重い病気に苦しんでいる人たちがイエス様を出迎えました。ちょうど十人いました。その中にはサマリア人の人もいました。この時代、ツアラアトにかかっている人は、社会から遠く離されて、集まって行動していました。仲の悪いはずのサマリア人もユダヤ人も同じ病気ということで一緒に行動していたわけです。

彼らは遠くからイエス様に呼びかけました。大きな大きな声で「イエス様！ 先生！ 私たちをあわれんでください！」と叫びました。どんな気持ちで「あわれんでください」と叫んだのでしょうか？ この苦しい病気を治してください。苦しんでいる私に目をとめてください。助けてください：とイエス様に向かって叫んだのですね。病気の痛み、つらさはそれは大きなものだったでしょう。病気の痛みだけでもつらいのに、その病気のために社会の中で普通に生活できず、遠くに離されていたら、そのつらさは想像もできないほどですね。

イエス様のいやし

そんな病気の人々の叫びにイエス様はどうお答えに

なったでしょうか？ イエス様は日ごろから、身体の不自由な人や社会からつまはじきにされている人たちに深く心をとめておられました。この時イエス様が言われたのは「行って、自分のからだを祭司に見せなさい」でした。祭司さんに自分の身体を見せることができるのは、病気がすっかり治った人だけです。まだ病気のままなのに、祭司さんのところに行つていいの？

しかし、この十人の病気の人たちは「イエス様がこうおっしゃっているということは、自分たちの病気は治るんだ！」と思い、喜びいさんで駆け出しました。そしてなんと、祭司さんのところに行き着く途中で、十人とも病気がすっかり治つたのでした。みんな大喜びです。

イエス様への感謝！

この十人のうち、一人のサマリア人だけは、自分がいやされたことがわかると、クルリと向きを変えて、来た道をもどっていききました。大きな声で神様を賛美しながら、イエス様のところに引き返してきたのです。周りの人たちもびっくりしたでしょうね。「あれ？ さつきまで病気だったのに!？」って。

このサマリア人はイエス様の足もとにひざまずき、ひ

れふして「イエス様、ほんとうにありがとうございます！」と感謝をささげました。イエス様はこのサマリア人のことをとても喜ばれましたよ。そしてこう言われました。「あとの九人はどこにいるのか。このサマリア人のほかに、神様を賛美するためにもどってきた人はいなかったのか。」それからこの人に言われました。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救つたのです！」

ほかの九人はどうしたのでしょうか？ 病気がなおったことで満足して、イエス様のことをすっかり忘れてしまったのでしょうか。病気をなおしてくださったイエス様のすばらしさに心の目を向け、生涯救い主であるイエス様とともに歩むことこそが大切なのです。

結び

イエス様は今も私たちにすばらしい恵みを一杯くださっています。イエス様を信頼して歩む私たちに、新しいのち、新しい人生を与えてくださいます。そんなイエス様を日々賛美し、感謝しながら歩んでいきましょう。

♪主イエスを喜ぶことは♪

(ミクタム・プレイズ&ワーシップ 54)

聖書 ルカ17・11～19 テーマ いやされた十人の病人

序論

(福井文彦)

ルカ独特の記事で、当時、この重い皮膚病(ツアラアト)は恐ろしい病気とされてきました。その重い皮膚病の人、十人をイエスがいやされました。ところが、そのことをイエスの所に帰って来て感謝したのは、九人のユダヤ人ではなく、サマリア人ただ一人だけでした。

一、主にいやしを求めた

イエスはエルサレムに行かれるとき、サマリアとガリラヤとの境に沿って東に向かわれました。そのイエスがある村に入られるとそこにいる十人の重い皮膚病の人たちに出会われました。当時、重い皮膚病にかかった人は、(彼らは遠く離れたところに立ち)とあるように、律法によって一般の人々に近づいてはならないと決められていたのです。そのために、「汚^{けが}れている、汚れている」と叫んで、人が近づくのを防がなければなりませんでした(レビ13・45～46)。

ですから、重い皮膚病の人ほど孤立無援なものはいな

かったのです。ところが、16節で明らかのようにその中に一人のサマリア人がいました。ユダヤ人とサマリア人は本来犬猿の仲で、敵対していました。しかし、重い皮膚病ということで社会から疎外されているという同じ境遇のために、一緒に過ごしていたのです。

彼らはイエスにお出会いと、このお方なら何とかしてくださいと信じました。それで、声を張り上げて「イエス様、先生、私たちをあわれんでください」と哀願したのです。

二、見ないで信じる信仰

たぶん彼らは、イエスがそれまでに病人に手をつけていやされたことを聞いていたと思います。ところがイエスは彼らをご覧になって不思議なことを言われたのです。(行って、自分のからだを祭司に見せなさい)と。

普通なら、まず、重い皮膚病がいやされるのを見て、祭司がきよめの儀式をします。それがすむと、はじめて彼らは一般の人との共同生活、すなわち社会生活が許され、営めるようになるのです。ところがこの時には、重い皮膚病はいやされていませんでした。それなのに、イエスは(行って、自分のからだを祭司に見せなさい)と

言われたのです。何とも不可解な命令です。

この重い皮膚病の十人は、「イエスが、〈行って、自分のからだを祭司に見せなさい〉、と言われたのだから、必ず道の途中でいやされるに違いない」と、見えるところによらないで主の言葉を信じたのです。そして、イエスが言われた通りに従いました。すると、〈彼らは行く途中できよめられた〉のです。

重い皮膚病がいやされたことをお互いが確認した時、彼らは嬉しくて嬉しくて跳び上がって歓喜したことでしよう。

三、恵みへの感謝

これらの十人の重い皮膚病の人のうち九人は、いやされたことを喜びながらも、いやしてくださいだったイエスに感謝するために帰って来ませんでした。病気がいやされるといふ外側に表われた奇跡は、彼らの救いとはならなかったのです。

ところが、〈そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった〉。サマリア人だけは、祭司のもとに行っ

てきよめられた証明をしてもらう前に、イエスの所に帰って来ました。

そして、感謝にあふれて「いやし」よりは「いやし主」、「賜物」よりは「与え主」と、イエスのもとに帰って来て、大声で神をほめたたえました。すなわち、神に栄光を帰し、遜ひたって主の霊の恵みを受けるために心を開きました。ここに〈ひれ伏して〉とありますが、これは「自分の一生を神にささげる」という決意の表明です。

するとイエスは、〈立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです〉と言われました。今や彼は、重い皮膚病がいやされる以上に大切な魂の救いをいただき、新しい人生を歩み出したのです。

結論

クリスチャン・ライフの特徴は感謝です。サマリア人のように主イエス（十字架）によって罪を赦ゆるされ、きよめられた私たちは、永遠なる究極的救いの恵みに生きる者とされたのです。これが純粹な感謝のゆるがない根拠です。すなわち私たちは聖霊とみ言葉により、環境の変化によって左右されない恵みへの感謝に生きる者とされたのです。

研究資料

(小平徳行)

ツアラアトのいやしの出来事であるが、ユダヤ人とサマリア人の姿勢を対比する事により、神の求めている信仰がどういふものであるかを教えている。

テキスト

11 エルサレムに向かう途中 ルカ9・51からはじまるエルサレムに上る旅の途中。サマリアとガリラヤの境を通られた ガリラヤはユダヤ人が住み、サマリアはサマリア人が住む地域であり、両者は互いに敵同士だと思っていた。この表現からは、サマリアとガリラヤの境界線に沿って通ったと考えられるが、境界線を横切って渡ったと考えることもできる。

12 彼らは遠く離れたところに立ち ツアラアトにかかった人は、律法によって、一定の距離を保たなければならず、また、自ら「汚れている、汚れている」と叫んで、人が近づくのを防がなければならなかった(レビ13・45～46)。16節で明らかにされるが、十人の中にはサマリア人もいた。ユダヤ人とサマリア人は犬猿の間柄であるにもかかわらず、彼らはツアラアトということで社会から

疎外されていたゆえに、一緒に過ごしていたのである。

14 行って、自分のからだを祭司に見せなさい ツアラ

アトの人が、きよめられたと認められるための一般的な手続き。この病はきよさに関わることをゆえに、その患部が本当に治ったかどうかを確かめるのは祭司であった(レビ14・2～20)。イエスは、あたかも治っているかのように行動することを命じることによって、彼らの信仰を試した。十人のうちにはサマリア人もおり、サマリア人にはゲリジム山に聖所があり祭司がいた。したがってエルサレムの神殿に行く者と、ゲリジム山に行く者とは分かれたであろう。彼らは行く途中できよめられた彼らがイエスの言葉に従った時、いやしの奇跡は起こった。かつてナアマンのツアラアトがきよめられた時も、信じて従うことが必要だった(Ⅱ列王5・14)。同様に、この十人が、きよめられる前から祭司のもとに向かったのは、見えるところによらず、主の言葉を信じたからである。彼らにはこのような信仰があった。その信仰によって彼らはいやされたのである。

15 そのうちの一人は、…大声で神をほめたたえながら引き返して来て 彼が神をほめたたえたことは、彼がい

やされたことが神のみわざであると理解したこと、このことをすべての人に喜んで知らせようとしたことを示している。十人の群れは病であった時は一つになつていたが、いやされた後は、ユダヤ人はユダヤ人、サマリア人はサマリア人に分離してしまつた。

16〜18 ひれ伏して 礼拝の姿勢を意味する。九人はどこに**いるのか** この九人はユダヤ人であつたと思われろ。この他国人 聖書中ここにしかでてこない言葉で「ほかの生まれ」という言葉。異邦人改宗者はエルサレム神殿の一番外側まで近づくことができるが、その先は入れない。そのことを禁じるために、そこに立てられている立て札にこの言葉が使われていた。エルサレム神殿の中に入ることが許されているユダヤ人は、帰つて来なかつた。この神の恵みに近づくことを許されない「この他国人」ひとりだけが、神を賛美するために戻つてきたのである。ユダヤ人であるイエスが、このサマリア人である自分をも顧みて下さつたということへの驚きと感動が、この感謝と賛美の背後にあつたのであろう。

19 あなたの信仰があなたを救つたのです 病気が治るほどの信仰は、十人が十人とも持つていた。しかし、イ

エスの御国の力に真にあずかつて救われる信仰は、感謝して神をほめたたえるために帰つて来たサマリア人だけが持つていた。**救つた** 新改訳第三版では「直した」となつてゐるが、直訳は「救つた」である。イエスはこのサマリア人にいやし以上のことがなされたことを言おうとしたのであろう。

いやしと救いは異なる。いやしの奇跡的な体験は、神を賛美し、イエスのもとに戻つてくるという心の中の大転換が起こらない限り、救いには直結しないのである。この心の中の転換をイエスは「信仰」と呼んでいる。九人のユダヤ人は、ツアラアトがいやされてユダヤ人社会に復帰し、元の生活に戻つただけであつた。彼らの姿勢はイエス・キリストの救いに対して示したユダヤ民族の態度にほかならない。これに対し、このサマリア人はイエスのもとに来て、新しい人生を歩み出したのである。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』（いのちのことば社）、The IVP Bible Background Commentary: NT, Leon Morris Luke (The Tyndale New Testament Commentaries)、榎原康夫『ルカ福音書講解』（教文館）

聖書

ルカ19・28〜40

タイトル

主がお入り用なのです

暗唱聖句

主がお入り用なのです。

ルカ19・34

目録

キリストが必要としてくださることを覚え、喜んで自分を主にささげる。

導入

(和田牧子)

皆さんはお家でお手伝いをしますか？ お皿洗いとか、掃除機をかけたとか、犬のお散歩に行く人もいます。みんなが手伝ってくれると、お家の人もとても喜んでくれると思います。今日はイエス様のお手伝いをした人たちと、子ろばのお話です。子どものろばさんもイエス様のお手伝いをしたのですよ！

子ろばをほどこいた弟子たち

オリブ山のふもとのベテパゲとベタニアという村に近づいたとき、イエス様は二人の弟子たちにおっしゃいました。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ったら、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気づくでしょう。それをほどこいて、連れてきなさい。」えっ？ よそのお家の子ろばを何も言わないで連

れてきていいの？ なんだか泥棒しているみたい？ そんな弟子たちの心配を知ってか、イエス様は続いて言われました。「もし『どうして、子ろばをほどくのか』と誰かに聞かれたら『主がお入り用なのです』と言いなさい。」弟子たち二人が出かけていくと、イエス様の言われたとおりの子ろばがつながれているのを見つけました。それで、つながれたひもをほどこいていると、子ろばの持ち主たちが「どうして、子ろばをほどくのか？」と聞きましました。弟子たちはちよつぴりドキドキしたかもしれませんが、イエス様に教えられたとおり、「主がお入り用なのです！」と答えました。

「お入り用なのです」って舌をかみそうな言葉ですが、「必要とされているのです」という意味です。すると不思議なことに子ろばの持ち主たちは、それ以上何も言わずに子ろばを連れていくことを許してくれました。神様がこの人たちの心に働きかけて、子ろばが大切なことのために使われるのだと教えてくださったのでしょね。

イエス様、エルサレム入城

二人が子ろばをイエス様のもとに連れてきました。そして子ろばの背中に自分たちの上着を敷き、イエス様を

3月

6日 礼拝メッセージ例

お乗せしました。イエス様がろばの子に乗って進んでいられると、大勢の人たちが次々と自分の上着をぬぎ、道に敷きならべました。

いよいよイエス様がオリブ山を下っていかれると、大勢の弟子たちが喜びいっぱいには神様を賛美し始めました。「神様がお立て下さった私たちの王に祝福がありますように！」天の上で平和が、神様に栄光がありますように！」

皆さん、王様がお城に入城するときのことを思い浮かべてください。王様つてろばに乗るものなの？ 絵本で見る王様や王子さまはふつう、りっぱな馬に乗って行進するものじゃない？ なぜここで、イエス様はろば、しかも子どもよろばに乗られたのでしょうか。不思議ですね。

実はろばは「平和」のシンボルなんです。力づくで家来や国民を押しさえつけるのではなく、世界に平和をもたらす優しいイエス様がお乗りになるのに、子ろばはびったりだったのですね。ふだんは荷物を運ぶだけの子ろばの子をイエス様はあえて選ばれたのでした。

私たちもお用いください

今日のお話では、イエス様のお手伝いをした人たちが

そして子ろばが出てきました。二人の弟子たちはイエス様が言われたとおり、ちょっと不思議な命令でしたが、子ろばを見つけて連れてくるお手伝いをしました。子ろばの持ち主たちも、王様のお役に立てるならと、喜んで子ろばを差し出しました。そして、子ろばも、まだ弱くて小さかったかも知れませんが、なんとイエス様を背中にお乗せして行進するお手伝いをしたのですね。

実は、今も生きておられるイエス様は、あなたにも「私のお手伝いをしてください。あなたのことが必要なのです」とおっしゃっています。イエス様はこの出来事のと、十字架刑への道を真っすぐに進まれます。私たちを、かけがえのない存在として愛するあまり、命まで投げ出すほどに低く低くされ、死んでくださったイエス様。それほど低く低くされ、死んでくださったイエス様。そればかりか三日目によみがえって今も一緒にいてくださるイエス様。

あなたも王であるイエス様のお手伝いをする人になりませんか？「主がお入り用なのです」とのお声にこたえて生きていきましょう。

♪わたしたちはろばの子♪(ホ99、イン91)

聖書 ルカ19・28〜40 テーマ 主がお入り用なのです

序論

(加藤郁生)

四つの福音書は、いずれも主イエスがエルサレムに入城する際に、子ろばに乗られたことを記しているが、ルカの福音書は、詳しくその経緯を述べている。今週はこの所から学びたい。

一、主がお入り用なのです

ルカの福音書は主イエスによるエルサレムの入城が、主のご主導のもとになされたことを、一つのエピソードをもって紹介している。

主イエスが、ベテパゲとベタニアに近づかれた時、二人の弟子を遣わし、1匹の子ろばを引いてくるように命じられた。この時、子ろばの持ち主たちへの返答のために教えられたのが「主がお入り用なのです」という言葉である。

この言葉を通して、弟子たちと子ろばの持ち主たち、そして子ろばが三者三様の係わり方をする。

二、主に遣わされた弟子たち

主イエスはこれまでも、弟子たちを先に遣わすようなことがあった(9・52)が、ここでは特別な使命があった。それはエルサレムに入城するために乗る子ろばを得ることであった。

弟子たちは、イエスの命を受けて村に赴くが、果たして主イエスが言われたとおり、まだ誰も乗ったことのない子ろばが見つけないことを見る。

普通であれば、子ろばの持ち主を捜しあて、子ろばを借りるか、あるいは買うかして、子ろばを引いてくる所だったろうが、主イエスが命じられたとおり、そのまま子ろばを解いていると、持ち主たちから「どうして、子ろばをほどくのか」と問われた。弟子たちは主から教えられていたので、弁明に努めるのではなく「主がお入り用なのです」との言葉をもって答えた。

このようにして弟子たちは無事に子ろばを手に入れ、役目を果たすことが出来たのであるが、このことは、主の弟子である私たちにも同様である。

私たちはともすれば、この世的な見方でものを考え、行動しがちであるが、大切なことは主のみ旨に従うこと

である。(主がお入り用なのです)と、神がご自身の働きのために本当に必要なものを私たちに示されたならば、信仰をもって祈り求めていくべきなのである。

三、主のために備えられた人々

み言葉のチャレンジを受けたのは弟子たちだけではな
い。子ろばの持ち主たちもまた、主イエスのみ言葉に触
れ、従った。

なぜ、子ろばの持ち主たちは逆らってもせず、弟子たち
の言うままに子ろばを渡し得たのか？ これについて、
持ち主たちが主イエスと知己の間柄であったからではな
いかという考えもある。

しかし、この場の状況を考えるとそうは考えにくい。
むしろ神が、聖霊を通して彼らに働いてくださったと見
ることの方が自然である。父なる神は、子なるイエスが
エルサレムに入城するにあたって、あらかじめ働いてく
ださり、ちょうど弟子たちが来た時に彼らがそこに居合
わせて、(主がお入り用なのです)と語る声に応答するよ
うに備えてくださったのである。主はご自身の宣教の働
きのために、このようにも人を備えてくださるお方であ
る。

四、主に用いられた子ろば

主イエスが子ろばを用いられたのは、旧約の預言のと
おり、ご自身が王としてエルサレムに入城することを自
覚されていたからである(ゼカリヤ9・9)。

しかもゼカリヤ書に表わされている王は、この世の力
ある王ではなく柔和な王であった。

実際、主イエスがエルサレムに来られたのは、この世
の王として君臨するためではなく、十字架の御苦難を受
けられるためであった(9・51、18・31〜34)。故に、主
イエスの選んだ子ろばは、柔和な王にふさわしい乗り物
として用いられたのであった。

その意味で私たちも、子ろばのように用いられたい。
この世では弱く力のない私たちかも知れないが、真に柔
和な王、平和の君たる主イエスを、背中にお乗せするよ
うな気持ちをもって、心から主にお仕えしたい。

主はそのような私たちを(お入り用)であるとして、
豊かに祝福して用いてくださるのである。

結論

主イエスは、子ろばを用いられた。私たちも子ろばの
ように、イエス様のお役に立つ者となろう。

研究資料

(木村勝志)

「天に上げられる日が近づいて来たころのことであった。イエスは御顔をエルサレムに向け」(9・51)、ひたすらエルサレム目指して進まれた(9・53、10・38、13・22、33、18・31、19・11他)。そして、イエスの地上最後の1週間、受難週が始まる日曜日、「なつめ椰子の枝を持って迎え」られたので(ヨハネ12・1、12・13)、「棕櫚の主日」と呼ばれるようになった。実際にエルサレムに入城されるのは45節。

テキスト

28〜31 これらのこと(11〜27)を話してから 時は過越の祭を目前に控えた頃である。イスラエルがエジプトの奴隷状態から解放されたことを記念する過越の祭が近づくと、人々はいつも感情的になっていた。当時ローマ帝国の支配下にあったイスラエルにとって、この時期はローマの支配から救い出されることを切望する時で、多くの人々は、旧約聖書の中で度々預言されている約束のメシアが現れて、ローマの支配下から解放してくださることを期待していたからである。ちょうど過越の祭の時期に

イエスがエルサレムに近づかれたため、イエスこそ待ちに待ったメシアで、「神の国がすぐに現れる」と思つて(11)、人々の興奮が高まっていた。そこでイエスは人々の誤った期待を正すために「ミナの譬え」を語られ、神の国完成までには時間がかかること、ご自分は今人々から拒絶されることを暗示されたのである。これらのことを話してから イエスは人々から拒絶されて十字架につけられ、救いを完成するためにエルサレムに入城されるのである。オリフという山 メシア出現の場所として重要な地(ゼカリヤ14・4)。ベテパゲ 正確な場所は不明であるが、ベタニア近隣の村である。ベタニア エルサレムの南東約3キロメートル(ヨハネ11・18)、オリブ山の麓にある村。二人の弟子 当時、使者は通常二人ずつ遣わされた。まだだれも乗ったことのない 神聖な用途に必要な条件である(民数記19・2、Iサムエル6・7)。ろばの持ち主は、過越の祭の巡礼者に対するもてなし、あるいは有名なラビを助ける栄誉と考えて貸したのであろう。

33 持ち主たち 複数の持ち主がろばを共有していたのは、彼らが貧しかったことを示し、次節の「主(ギ)キユ

リオス」と同語を用いることによって、イエスこそ至高の主であり、真の所有者であることを示そうとしている（詩篇24・1）。

35〜37 その上に：ゼカリヤ9・9〜10の成就であることを、マタイ(21・4〜5)とヨハネ(12・14〜15)は明記するが、異邦人読者を対象とする本書(1・1〜4)では省略されている。王は時にはろばにも乗ったかもしれないが、力強い軍馬に乗って現れるのが普通であった。ろばは、軍事や行進のためではなく民事のために用いられ、平和の人である商人や祭司が乗った。それゆえこれは、ローマの凱旋行進がいでんのような入城ではなく、柔和で平和な入城であることを示している。敷いた未完了時制は、行進の間、人々が次々と上着を敷き続けたことを示している。これは王の即位式るときに行う行為である(Ⅱ列王9・13)。本書は、並行個所が省略する群衆の熱狂ぶりを詳しく描写している。祭の巡礼者たちはしばしば喜びの叫びをもって歓迎されたが、この時はそれ以上に大きな認識をもつての歓迎であったことを37〜40節は示唆している。

38 過越の祭の間、ハレル詩篇(113〜118篇)が歌われた。

後にこれらの詩篇はやがてもたらされる救いを預言する詩と理解されるようになった。その一連の詩のクライマックスである118・25〜26を弟子たちは賛美し続けたのである。イエスがかつて、詩篇118・22をメシヤ預言の詩として引用された(ルカ20・17)。並行個所(マタイ21・1〜11、マルコ11・1〜11、ヨハネ12・12〜19)では「ホサナ(アラム語の音訳。私たちを救ってください、の意)」と記されているが、異邦人読者を対象とする本書では省略されている。主の御名によって来られる方、王 イエスが全地を統べ治める王であることはもはや隠しておくことではなくなった。天には平和：イエスご降誕時の御使いたちの賛美を想起させる(2・14)。

39〜40 石 神殿、石のことであろう(19・44、20・17)。石が叫びます 不可能なことが起こることを意味することわざ 諺(ハバクク2・11)。群衆がイエスをメシヤとして歓迎するのを止めるのはもはや不可能であることをイエスは確信しておられた。

参考図書 注解書 W. L. Liefeld (Expositor's), L. Morris (Tyndale) 他。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT 他。

聖書

ルカ21・1〜4

タイトル

大切なのは献げる心

暗唱聖句

この貧しいやもめは、だれよりも多くを
投げ入れました。 ルカ21・3

目標

すべてをご存じの神に信頼し、真心から
の献げ物をする。

導入

(飯田勝彦)

教会で献金があります。笑い話ですが、ある人が献金をしました。本当は千円献げようとしたが、献金のとき一万円しかありませんでした。その人は一万円を献げ、礼拝後に会計担当者から九千円のおつりをもらったそうです。

献金は神様への献げものです。前もって準備しておきましょう。そして何より献げる心が大切です。

皆さんはどのような心で献金していますか？ 考えてみてください。

金持ちの献げる心

ある金持ちが神殿にあるさいせん箱にお金を献げまし

た。当時のさいせん箱は、箱にトランペットの音が出る方の形をしたものが付いていたようです。そこにお金を入れると「ジャラン！ ジャラジャラジャラン！」と音が鳴ったのです。お金が多いほどさいせん箱に入れる音は大きくなりました。くじ引きで一等賞などが当たると「大当たり！」と言いながら、係の人が金を鳴らします。すると周りにいた人がその音で「だれか賞が当たったんだ」振り返ります。すると、賞が当たった人は多くの人々の注目の的となって気分を良くします。

それと同じように、金持ちはたくさんお金を献げることで多くの人から注目を集めていたのです。この金持ちの献金は、神様のためにというよりも、たくさん献げる自分を誇るためでした。金持ちは、多くの金を持つていたので、献げてまだまだ多くのお金が残っていたのです。一億円持っている人が百万円を献げるようなものです。金持ちにとっての献金は、額は大きかったかも知れませんが、痛みを伴わない献金でした。

貧しいやもめの献げる心

一方、貧しいやもめの献げものはどうだったでしょうか？ 彼女の献金は、レプタ二つでした。これは今でい

うと250円ぐらいになるでしょうか。ごくわずかの金額でした。しかし、イエス様はこれを見られて「貧しいやもめは、だれよりもたくさん献げた」と言われたのです。金持ちたちの献金の方がやもめの献金よりもはるかに高額でした。なのに、やもめは「だれよりも多く献げた」とイエス様が言われたのはどうしてでしょうか？ それは、彼女は乏しい中から献げたからです。彼女の全財産が250円にも関わらず、財産のすべてである250円を献げたなら、そこにはどれほどの勇氣が必要だったでしょう。

神様に喜ばれる心

今日の個所で1節「献金箱に献金を投げ入れているのを見ておられ」、2節「レプタ銅貨を二枚投げ入れるのを見て」とイエス様が見ておられたことがわかります。でも、イエス様が見られたのは金持ちややもめが献げたお金だけではありませんでした。イエス様は、彼らの生活や心を見られたのです。それは「まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、だれよりも多くを投げ入れました。あの人たちはみな、あり余る中から献金として投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから」

とイエス様が言われたことから分かります。

これは神様も一緒です。神様は私たちがどのような心で献げものをするのかを見ておられます。神様はやもめの心を見て喜ばれました。それはどんな心だったでしょうか。

それは、神様への感謝と神様への信頼の心です。もう一つは献身の心です。全財産を献げたら明日から生活はどうしようという心配もあるでしょう。でも、やもめはこれまで生活を守って下さった神様を感謝しつつ、これからも助けて下さるといふ信頼を持って献金しました。それは、全生活をあなたに委ねますといふ献身だったのです。

まとめ

神様は感謝と信頼と献身の心をもって献げるものを喜ばれます。そして、そこには神様の祝福を体験できる恵みがあります。喜んで神様に献げましょう。

♪けん金の歌（いまそなえる、いまささぐる）♪

（ホ140、こ17、こ改24・1、イン52、ふ73）

聖書 ルカ21・1〜4 テーマ レプタ2枚をささげたやもめ

序論

(高橋頼男)

この「やもめの献金」の記事の中でドキツとすることが二つ出てきます。一つは、イエスは金持ちたちや貧しいやもめが献金する様子を注意深く〈見ておられた〉ことです(私は礼拝の時、信徒の方が献金する様子は出るだけ見えないように心掛けています)。

さらに、それぞれが献げた献金について(この貧しいやもめは、だれよりも多くを投げ入れました)と献金を比較して評価されたことです。

この記事の真意と私たちの献金についても一度考えてみましょう。そして、神が喜ばれる献げ物について深く思い巡らしましょう。

一、金持ちたちの献金(1)

金持ちたちが宮で献げ物をしていました。神殿の壁に取り付けられた真鍮しんちゆうのラツパのような形をした献金口に、袋から取り出された硬貨がジャラジャラと大きな音をたてて投げ入れられました。相当な額が投げ入れられ

たことがわかり、周囲の人々は思わず振り向きませんでした。彼らは金持ちで、有り余る中から投げ入れたのです。残りを十分取っておいて、余裕をもって献げたのです。彼らは、人前でのこのような献金行為が好きでした。

二、やもめの献金(2、4)

ひとりのやもめが来て、誰だれに知られることもなく、そつと献げ物をしました。彼女がささげたものは、彼女の手に握られていた汗ばんだレプタ銅貨二つでした。高速道路では、これ以上遅く走ってはならないという「最低制限速度」という規定がありますが、レプタ二つは、神殿においてこれ以下のささげものを献げてはならないという「最低制限献金額」という規定すれすれのものでした。2レプタ以下の献金は献げ物とはみなされず、むしろ神を侮辱する行為とされたのです。

三、「だれよりもたくさん入れた」(3)

それぞれの信者によって献げられた献金に多い少ないがあるのでしょうか。少なくともこの場合、主は「ある」と言っておられるのではないのでしょうか。では、何を基準に多いか少ないかが定められるのでしょうか。単に金額の多い少ないではありません。それは、「私たちに委

ねられた収入総額に対する献金額の比率(%)、あるいは、「その人が神にささげた後に残った金額」という言い方ができるかもしれません。

J・ウエスレーは、「自分の必要最低限の生活費を除く残り金額をささげ、決して余分な金額を持たないように気を付け、神と財布とを一つにした」といいます。全ての信仰者がこのような献金ができるとは限りません。しかし、このように所有に対して全く聖別された、シンプルな経済感覚を少しでも身につけたいものです。私たちの情性的な献金が戒められ、主の前に新しいチャレンジを受ける必要があります。

四、神に喜ばれる献げ物

このやもめの献金「レプタ二つ」に込められ、表現された信仰こそ、主をご覧になって喜ばれ評価される献げ物です。それは、少なくとも次のような献げ物です。

- ① 神への感謝 これは神に対する溢れる感謝の表現となった献金でした。
- ② 神に対する信頼 彼女がささげたレプタ二つは、彼女の生活費であり、しかもその全部でした。生活費は自分のいのちを支えるための最後のお金です。そのいのち

ちのお金をささげるとは、自分の一切の必要は、神が必ず満たしてくださるとの信仰と信頼があつてこそ可能です(ピリピ4・19)。「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます」(マタイ6・33)。

- ③ 神への献身 彼女が2レプタを献げても、献げなくても、神の宮の倉には何ら変わりがありません。しかし、彼女の持つ全てである2レプタをあえて献げることにより、彼女は卑しい自分自身をささげたのです。

「神のみこころにしたがつて、まず自分自身を主に献げ」(IIコリント8・5)。自分を献げることのない献金は、必ず献げ惜しみをします。

結論

献金は神への感謝、信頼、献身です。主は私たちのためにどれほどの献身をして下さったでしょうか(ピリピ2・6〜8、Iヨハネ3・16)。また私たちはこの地上で旅人、寄留者であることを覚えましょう(ヘブル11・13)。自分とその生涯を主に献げ、委ねられたものを大胆に主のために献げて用いていきましょう。神に献げられた自己とその生涯こそ神が喜ばれる献げ物なのです。

研究資料

(小平徳行)

やもめの献金の場面である。この出来事の直前の段落は、イエスが律法学者について語っているところで、彼らは厳しいさばきを受けるべき者であった。彼らは「見栄を張って長く祈ります」(20・47)と言われているように、人に見られるために義を行う偽善者であった。しかし、このやもめは対照的に、人々からは評価されない献金をした。レプタ二つが、やもめにとつてどのような意味を持っているのかは、人々には隠されていたのである。その隠れた事を見ておられたのがイエスであった。

テキスト

1 献金箱 この時代のユダヤの献金箱は箱にトランプット状の口がついたもので、それが神殿の「婦人の庭」(ここまではユダヤ人の婦人も入ることができた)に13箱置かれていた。それぞれの箱には、札が付いていて目的別に区分けされていた。ささげる人は、自分の名前と何のためにささげるかを言ってささげ、箱の脇には神殿を管理している祭司が帳面ののような物を持って立ってお

り、誰がいくら献金したかを言って記帳した。イエスは金持ちたちが見栄のために献金して得意になっていることに心を痛めておられた。献金(ギ)ドローラ) 義務としてではなく自発的なささげ物を指す。見ておられたマルコでは座って見ておられたことを伝えている。座るところとは審判者として權威の座に着くことを連想させる。イエスはここでなされるすべての行為を見抜き、正しくさばかれるお方である。

2 貧しい(ギ)ベニ克蘭) この語はルカが通常用いておらず、新約聖書でもここだけにしか用いられていない。やもめの貧しい状態を強調しているのであろう。律法学者たちが、やもめの家を食い尽くしていたことも、やもめの貧しさの一因であった(20・47)。やもめは一世紀のユダヤにおいてお金を稼ぐ方法がほとんどなく、教会はやもめを助ける義務があった(使徒6・1、1テモテ5・16、ヤコブ1・27)。レプタ銅貨を二枚 これは極めて少額であった。「レプタ」は「小さい、薄い」の意味。レプタは最少額の銅貨で、2レプタは1デナリの64分の1であり、ローマの貨幣では1コドラントに相当する(マルコ12・42)。1コドラントは当時ローマの銭湯一回分

の入浴料であった。タルムードによると2レプタは特別な場合を除いて、献金に課せられた最低額であった。

3〜4 まことに、あなたがたに言います 直訳すると「わたしは真実をあなたがたに言う」となる。他の人からはだれからも目を留められることのない、やもめの小さな行為の内にある真実を明らかにされ、尊ばれた。だれよりも多くを投げ入れました イエスの言葉を文字通り訳すならば「(他の) だれよりも多く」ではなく「(他の) すべて(人々のささげものすべてを合わせた分) よりも多く」となる。イエスはささげ物において金額的な価値がすべてではない事を示している。ささげた量ではなく自分のために確保した量という点から評価された。もしも基準が、ささげた後にどれほど残っているかということであれば、やもめは確かに、他の金持ちたちにはるかに勝って多くささげたとと言える。なぜなら金持ちたちはあり余る中からささげたので、たくさん手元に残っていたが、やもめは乏しい中から持っているすべてをささげたからである。持っていた生きる手立のすべてイエスはこれが彼女の全生活費であることを知っておられた。彼女には自分の明日の生活を守ってくださる神の

愛の配慮に対する信頼があったのであろう。これは自暴自棄や悲壮感から行なったことではなく、神への献身の思いから喜んでなされたことである。ささげることは信仰に直結している。この心からの献身的なささげものは、どんなに少額であっても神の御前に尊いのである。

このやもめの行為は、隠れたことを見ておられる神の前でなされたことであったが、イエスはこのささげものの意味を弟子たちに明らかにした。後に、ベタニアで一人の女性が高価なナルド油をイエスに注ぎかけた時も、その行為の意味を明らかにされたのはイエスであった。イエスは人間の行為一つ一つにおいて、目に見える所だけでなく、その人の背景も、その心もすべてをご存知の上で正しく評価してくださる。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』、榎原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解』(以上のちのことは社)、『The IVP Bible Background Commentary: NT, Leon Morris Luke (The Tyndale New Testament Commentaries) 他

聖書 ルカ22・31〜34、54〜62

タイトル キリストのまなざし

暗唱聖句 主は振り向いて、ペテロを見つめられた。

ルカ22・61

目標 赦しと回復を与えてくださる主のまなざしの中で生きる。

導入

(後藤 真)

「よし、きょうから毎日宿題をがんばるぞ」と決心しても、ついついゲームをしてしまうというようなことがありますか。自分ではやると決めていても、途中で心が折れてしまって、結局失敗したという経験はだれにでもあるでしょう。イエス様の弟子、ペテロも同じでした。決心したことを投げ出してしまったのです。

鶏が鳴く前に

イエス様がもうすぐ捕まえられて十字架にかけられるというとき、イエス様はペテロに言いました。

「シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられませんでした。しかし、わたしはあなたのために、あなたの信

仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

シモンとはペテロの本当の名前です。ペテロはイエス様がつけたニックネームでした。イエス様はペテロが信仰をなくしそうになるような失敗をすることと、そこから立ち直ることをペテロに教えたのです。

自分こそイエス様のいちばんの弟子だと思っていたペテロは言い返しました。

「主よ。牢屋に入れられるとしても、たとえ死ぬことになってもあなたといっしょに行きます。その覚悟はできています」。

けれどもイエス様はペテロに伝えました。

「今日、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います」。

捕らえられたイエス様

イエス様はついに捕まってしまいました。そして明日の朝にピラトの前に引き出すために、まず大祭司のところに連れて行かれました。そのころイスラエルを治めていたのはローマです。イエス様の裁判はローマ総督ポンテオ・ピラトがやることになっていました。イエス様は

裁判にかけられるような罪は何ありませんでした。それで、イエス様の罪をでっちあげなければならなかったのです。そこでイエス様はまず大祭司のところに連れて行かれて厳しい質問を受けることになりました。

ペテロは連れて行かれるイエス様を遠くから見ていました。広い大祭司の家の中庭でたき火をしている人たちがいたので、その中に混じってイエス様の様子を見ようとしたのです。するとそこで召使いの女の人がペテロをじつと見て言いました。

「この人は、あのイエスといっしょにいました」

ペテロはすぐに

「わたしはその人は知らない」

と答えました。次に他の男の人がペテロをイエス様の仲間だと言いましたがすぐにペテロは「違う」と答えました。それから一時間ほど過ぎたとき、今度は別の男の人が言いました。

「確かにこいつはイエスといっしょにいたぞ。ガリラヤの人間だからな」。

「あなたが何言ってるのか分からない」

とペテロは、男の人が言い終わらないうちに言い返しま

した。そのとき鶏が鳴きました。ペテロがはつとして目を上げると、ちょうどイエス様を通り過ぎようとしていました。イエス様はペテロを見つめました。

イエス様のまなざし

このときイエス様はどんな目でペテロを見たでしょうか。聖書には書かれていないので分かりません。でもペテロはイエス様の目を見たとき、死んでもイエス様についていくと言ったのに、その決心が守れなかった自分に気づきました。そして、イエス様に申し訳なくて、外に出て激しく泣いたのです。

イエス様は失敗したペテロが立ち直ることを願っていました。イエス様は「悔い改めてもういちど従って下さい」と優しい目で招いてくださったのだと思います。わたしたちもイエス様を悲しませることをしてしまいかもしれません。でも一度失敗したら終わりではありません。そのときは悔い改めてもういちどイエス様に従っていきましよう。イエス様は優しい目で招いてくださっています。

♪両手いっぱいのお愛♪

(PW13、新聖歌483、ホ146、イン41)

聖書 ルカ22・31〜34、54〜62 テーマ キリストのまなざし

序論

(小泉 創)

あなたは人の目が気になることがありますか。自分のことはよくわかっていきますか。わかっているようで案外自分のことは見えていないものです。危機的な状況に立たされると、その人の本当の姿があらわれることもよくあります。私たちの姿を、イエスはどのようにご覧になっておられるでしょうか。

一、イエスの予告

イエスはペテロに向かって、あなたはサタンのふるいにかけられる、と告げられました。このやりとりの直前に、弟子たちは自分たちの間で誰が一番偉いかを話していましたし、イエスの一番弟子であったペテロにとってこの言葉は受け入れがたいものでした。自分はどんなときも強いと信じていました。イエスと一緒に牢にも行くし、死ぬ覚悟もある、というペテロの言葉は嘘ではありませんでした。事実、ゲツセマネで剣を取ってイエスを

守ろうとしたのはペテロでした。自分の信仰がなくなりそうになるとか、倒れることになるなどは、想像することもできないことでした。しかしイエスは「あなたは三度わたしを知らないと言います」と告げました。自身も気づかない弱さが、神の言葉によって探られることがあります。

二、ふるいにかけられて

ペテロはゲツセマネで必死に戦いましたが、結局イエスを連れ去られてしまいました。ペテロはイエスから遠く離れてついていきました。大祭司の家の中庭に入り込んだペテロは、これから自分がふるいにかけることを知りませんでした。彼の目の前にあらわれるのは、召使いの女、名もない男たちでした。「あなたはイエスと一緒にいた」「あなたは彼らの仲間」「イエスと一緒にいたガリラヤ人だ」という言葉を投げかけられますが、彼らは何の権威ももっていない人々ですし、とるにたりないやりとりのようでもあります。ペテロは彼らに対して、「私は(イエスを)知らない」、「いや、違う」、「あなたの方の言っていることは分からない」と答えてしまいました

た。ペテロの信仰は揺さぶられ、自分の口でイエスとの関係を否定してしまったのです。ペテロは恐れにとらわれたのでしょうか。何とかこの場をごまかして乗り切ろうと思ったのでしょうか。「私はイエスの一番弟子であり、あの方が宣教を始められてからずっと一緒に旅をしてきました。イエスは真実で正しいお方であり、私たちがずっと待ってきた救い主なのです」と証しをすることもできたはずですが。イエスと一緒に牢にも行き、死ぬ覚悟はどこに行ってしまったのでしょうか。人は自分が思っているほど強くなく、大切な方を裏切ることも、自分の命を優先してしまうこともある存在です。

三、イエスのまなざし

イエスは振り向き、ペテロを見つめられました。ペテロは主の言葉を思い出して、激しく泣きました。

ペテロを見つめられたイエスのまなざしはどのようなものだったのでしょうか。ふがいないペテロを責めるのも、見限るのでもなく、ありのままのペテロを慈しむようなまなざしではなかったのでしょうか。ペテロは自分が思っていたように強い人間ではありませんでした。人の

目を恐れ、知らぬ間に大切なイエスから遠く離れてしまうような、弱く頼りない人間でした。

しかしイエスのまなざしはさらに先のペテロの姿を見ておられました。挫折したペテロの信仰がなくならないように祈られ、そのところから立ち直って、兄弟たちを力づけているペテロを見ておられたのです。

ペテロは自分の弱さ、罪深さの中でイエスの十字架とよみがえりに出会い、新しくされ、主の恵みに生かされる弟子へとつくりかえられていくのです。

結論

イエスは、私たちの頼りなく罪深い姿もご存じです。それでも大いなる期待をもち、私たちをつくりかえて下さいます。感謝し、恵みの中に生かしていただきましょう。

研究資料

(小平徳行)

ペテロの否認は四福音書すべてに取りあげられているが、ルカだけがイエスのペテロに対するとりなしについて記している。イエスはペテロが否認することだけでなく、その後に、立ち直って、兄弟たちを励ます者としての役割を果たすことを見通しておられた。

テキスト

31 シモン、シモン 二度名前を呼ぶのは特別の感情の表れである(創世記22・11、ルカ10・41、使徒9・4)。サタンが…願って、聞き届けられました。「サタン」はヘブル語から来ており「敵対者」、「訴える者」の意。サタンがもたらすことのできる試練や誘惑は神に許されたものだけである(ヨブ1〜2章参照)。あなたがたイエスのすべての弟子たちのこと。麦のようにふるいにかける 麦をふるいにかけるのは、もみがらなどをおおきく除くため。ここでは、大きな試練によって信仰がなくなるほどに揺さぶられることの比喩。ペテロの否認の背後にサタンの働きがあったことはルカだけが記している。

32 わたしは…あなたの信仰がなくならないように祈りました。「わたしは」は強調であり、サタンにまさるお方のとりなしである。イエスは「試練に遭わぬように」とは祈らなかつた。試練を通ることはキリスト者にとって不可欠なことであり、試練の中の信仰、試練を経た信仰こそ精錬された価値ある信仰である(1ペテロ1・7)。あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。これは弱いペテロに対する信頼をこめた愛の励ましであった。

33 主よ。あなたとご一緒なら、…死であろうと、覚悟はできております このペテロの言葉は、勇ましい悲壮感と主への愛にあふれているが、彼はこの時、自分の弱さもサタンの力も認識していなかつた。人間的な強さも情熱も、サタンの力の前には無力なものである。

34 今日、鶏が鳴くまでに、…三度 イエスは人知を越えた知識により、ペテロの否認の回数と時まで予告している。わたしを知らないと言います。これは直訳すると「わたしを知っているということを否定するであろう」となり、イエスそのものの否定ではないが、イエスとの関わりを否定していることになる。

54 ペテロは遠く離れてついで行った。ペテロは遠く離れて恐る恐るついで行った。人を恐れた弱気のペテロに、ただちに誘惑が襲った。「人を恐れると民わなにかかる」のである（箴言29・25）。

56〜57 一回目の否認。ある召使いの女 この女は門番であった（ヨハネ18・16）ので、イエスの弟子たちが神殿に来た時によく見かけていたのである。じっと見つめて（ギ）アテニゾー）「詳細に調査する」というニュアンスがある。

58 二回目の否認。ほかの男 ここは男性形が使われている。マタイでは「別の召使いの女」（26・71）、マルコでは「召使いの女」（14・69）となっている。ヨハネでは「人々」（18・25）となっていることから、これらの人々が一緒にいたのであろう。この男性は先の女中よりも、はっきりとペテロをイエスの仲間の一人と断定した。いや 直訳すると「男よ」。

59〜60 三回目の否認。別の男が強く主張した ヨハネによれば大祭司のしもべでペテロに耳を切り落とされた人の親類であった（18・26）。したがって他の誰よりもペテロをしつかりと見ていたので、主張は強かった。ガリ

ラヤ人だから このことは言葉のなまりから分かった（マタイ26・73）。ガリラヤ地方はユダヤ地方とはアクセントが違った。あなたの言っていることは分からない。マタイやマルコは、ペテロが激しく誓って、イエスと関係ない者であると主張したことを記している。

61 主は振り向いてペテロを見つめられた このことはルカだけが記している。大変な状況にあったイエスが覚えて振り向いて見つめたところに、ペテロに対するイエスの深い関心、思いやりを見ることができるといえる。このまなざしはペテロに、イエスの予告を思い出させた。知らないと言います（ギ）アパルネオマイ）「否定する」の意。

この語は人格的関係を否定、放棄する意味があり、「告白する」、「言い表わす」の反対語として、棄教、背教の教会術語となった（ルカ12・9、Ⅱテモテ2・12）。

62 そして、外に出て行って、激しく泣いた ここにペテロの後悔と自責の念の深さが表れている。しかし、この涙は「神のみこころに添った悲しみ」であり、「救いに至る悔い改めを生じさせ」るものである（Ⅱコリント7・10）。

参考図書 3月13日分と同じ。

聖書

ルカ23・13〜25
身代わりの十字架

タイトル

神は、罪を知らない方を私たちのために

暗唱聖句

罪とされました。 IIコリント5・21

目 標

罪なき神の御子が私たちの身代わりに十字架にかかってくださったことを知る。

導入

(後藤 真)

今は受難節です。受難節（四旬節・レント）とは、イエス様の十字架の苦しみを思い出して生活する季節のことです。特別な礼拝をしたり、断食（ご飯を食べないこと）をしたりする教会もあります。

みなさんの教会にはそのような決まった習慣はないかもしれませんが。でも、ぜいたくは控えること、毎日やるべきことに一生懸命励むこと、自分第一ではなく周りの人たちのことを考えて生活することなどはできます。イエス様の十字架を思い出すことで、イエス様の生き方を少しまねてきたらいいと思います。

罪のない方

先週お話ししたことを少し思い出してください。その

ころイスラエルを治めていたのはローマです。裁判はローマ総督ピラトが行いました。イエス様を捕まえたのはイスラエルの人たちです。それで、イスラエルの人たちは「イエスはみんなを惑わす者だ」と訴えて、ピラトに裁判をしてもらおうとしたのです。

ところがピラトがいくら調べてもイエス様には罪は見つかりませんでした。イエス様はだれも惑わしてはいなかったのです。ピラトだけではなく、そのころイスラエルの領主だったヘロデも罪を見つけられなくて、ピラトにイエス様を送り返してきたのです。

「この人には死刑にするような罪はない。だからわたしはこの人をむちでこらしめて釈放する！」

ピラトはイスラエルを治めているローマの総督として、そのように判決を言い渡しました。

人々の反対

ほんとうならばこれで裁判は終わりになるところでした。ところがそこに集まっていた祭司長たち、議員たち、民衆たちは一斉に叫びました。

「その男を殺せ、バラバを解放しろ！」。

このバラバは暴動と人殺しのために捕まっていました。

バラバには罪があつたのです。ところが人々は

「十字架だ、イエスを十字架につけろ！」。

と叫び続けたのでした。

ピラトは三度目に言いました。

「この人がどんな悪いことをしたのか。死刑にするような罪は犯していないじゃないか。だからわたしはこの人をむちでこらしめて釈放するのだ！」。

ところが、人々はイエス様を十字架につけるように叫び続け、その声は大きくなるばかりでした。

「このイエスという男を十字架にかけたとしてもわたしには関係ないことだ。しかしイエスを釈放したら暴動が起きるに違いない。その方が問題だ。そうしたら将来出世できなくなるかもしれない！」。

ピラトはそんなふうに考えたのかもしれませんが、自分を守るため、人々の声に従って、裁判を曲げたのです。

こんなことはあつてはならないことでした。

バラバの代わりに

こうして強盗で人殺し、本当は罰を受けなければならぬはずのバラバがゆるされて、なんの罪もないイエス様が十字架にかかることになりました。

けれども、イエス様は

「わたしには罪はない！」。

と言い返すことをしませんでした。なぜでしょうか。罪のないイエス様が十字架にかかって神様に見捨てられることこそ、イエス様が心に決めて受け取った、神様の道だったからです。

罪とは、神様を忘れて、自分の思い通りに生きることです。罪の罰は、神様から忘れられ、神様とのつながりがぶつ切り切れてしまうことです。そして永遠の神の国で生きられなくなることです。

わたしたちは自分の罪のために、神様から忘れられ神様と関係ない者となるという厳しい罰を受けなければなりませんでした。けれども、イエス様はわたしたちの身代わりとして、十字架で罰を受け、死んでよみがえってくださいました。

イエス様が身代わりになって、与えられた永遠のいのちです。このいのちを、神様としっかりとつながって生きていきたいと思えます。

♪わたしさえも愛して♪ (PW 27、ホ74、ふ74)

聖書 ルカ23・13〜25 テーマ 身代わりの十字架

序論

(宮澤清志)

ローマ総督ピラトは、裁判の結果として、イエスに何の罪も見いだせないと、祭司長たちと役人たちと民衆に告げました。しかし彼らはこの判決を認めず、死刑囚のバラバを釈放してイエスを十字架につけるよう叫びました。ピラトは叫ぶ声の力に負けて、バラバを釈放し、代わってイエスが十字架につけられることになりました。

一、圧倒的な罪の力

バラバについて聖書は、〈都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入れられていた者〉(19)と紹介しています。後に、イエスの横で十字架につけられた犯罪人のひとり「おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。」(ルカ23・41)と言っています。あるいはバラバの仲間だったのかも知れません。バラバも、自分の犯した罪のためにさばきを受け、死刑を受けることを当然とっていました。

自分の罪を自覚し、定まっている死に対して逃れることができないうバラバの姿は、私たちがすべての人間の姿です。

聖書に「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」(ヘブル9・27)、また「罪の報酬は死です。」(ローマ6・23)とあるように、私たちは自分の罪のために神の前にさばかれるなら、死のほかに答えはないものです。罪を犯したくないと思っても、振り返れば罪だらけであり、死にたくないと思っても、逃れようがないほどに、無力な存在です。

二、身代わりとなられたイエス

バラバについて、その並行箇所では「バラバ・イエスカ、それともキリストと呼ばれているイエスカ。」(マタイ27・17)とピラトが群衆に尋ねたと訳しています。

つまり、バラバも当時ありふれていた「イエス」という名だったのです。バラバにしてみれば、助かる希望がまったくなかったのに、自分と同じイエスという名の男が突然にあらわれ、自分に代わって死刑になってくれしました。それも、バラバが自分の罪を償ったわけでもなく、

心を入れ替えたことへの報いでもありません。バラバは何も知らず、何もしないでただ赦されました。この一切は、人が救われるのは、その行いによるのではなく、一方的な神の恵みであることを、極端なほどにあらわしています。

私たちは、自分の罪のために誰かが代わって死んでくださる方がいるなど考えられない、つまらない人間ですが、神の恵みが何の報いも求めずに与えられました。イエスの十字架によって、罪が赦されて救われる道が開かれたことを、ただ感謝して受け取るほかはありません。

三、バラバはどうして

自分の罪の深さを思い知らされ、その報いの重さに恐れおののくほかないバラバの姿は、私たちの姿と重なります。

そして、イエスの命と引き替えに釈放されたバラバのその後がどうなったのかは、聖書に一切しるされません。むしろ、イエスの十字架が私のための身代わりの死であったと信じるクリスチャン一人一人が、「その後のバラバ」となって、主の恵みに応えて歩んでいくことを求

められているように思います。

また、イエスが身代わりとなられた罪人は、バラバだけではありません。祭司長や長老たちのねたみ、また民衆たちの無知、そして総督ピラトが自己保身のために裁きを曲げた罪がありました。いずれも私たちが持つ罪であり、すべてをイエスは反論したり責めたりしないで、負ってくださいました。

私たちの身代わりとなって十字架についてくださったイエスは、私たちの病を担い、痛みを負ってくださいました。逃れられなかった罪の力に縛り付けられ、死に対して無力であった私たちが、主に委ねるときに困難な中でも絶望に終わらずに、平安を得、希望に生きる力が与えられるのです。

結論

私たちの負いきれない罪の重荷をキリストは代わって受けて、十字架に死んでくださいました。このキリストを信じて、罪が赦されたことを喜び、どんな悩みもおおねできることを感謝しましょう。

研究資料

(中島啓一)

13 **ピラト** ピラトは紀元26年頃から36年まで、ローマから総督としてユダヤ地方の統治のために派遣されていた。平常はカイザリヤに居住していたが、過越の期間、監視を強めるためにエルサレムに滞在していたようである。**祭司長たちと議員たち** ピラトはヘロデのもとからイエスが戻ってきたときに、ユダヤの有力者たちを再び招集した。**民衆** 民衆からの人気は、ここまでユダヤの指導者たちの敵意からイエスを守る役割を果たしてきたが(19・47〜48)、ここで彼らは、その役割にとどまるか、イエスを攻撃する側に移るか岐路に立たされる。

14 **民衆を惑わす者** ユダヤの指導者たちはイエスをこのように呼んだが、実際には民衆を惑わしたのは彼らの方であった。すなわち民衆は神の民として、神の遣わされた救い主を受け入れるべきであったのに、指導者たちはそれを妨げ、民衆を邪悪な道へと導いたのである。

15〜16 **ヘロデも同様だった** ヘロデがイエスを送り返してきたことで、ピラトはイエスの無罪をさらに強く確信した。この人は死に値することを何もしていない。最

初は「この人には、訴える理由が何も見つからない」(4)であったのに、ここでは「この人は死に値することを何もしていない」と論調が弱まっている。だから私は、**むちで懲らしめたくて釈放する** 本来イエスには、どんな小さな罰に価する罪もまっぴりなかつたにもかかわらず、釈放するための妥協案とはいえ、ピラトはここで、イエスに対するむち打ちを提案した。このことの中に、最後には民衆の声に負けてしまうピラトの弱さを垣間見ることができるといえる。

17 **口語訳が「」付きで「祭」ことにピラトがひとりの囚人をゆるしてやることになっていた」と記すこの節は、いくつかの重要な写本で欠けており、原典にはなかった可能性が高く、口語訳以外は、欄外注での記載となっている。しかしその内容は次節以降の理解を助けるものであり、他の福音書の記述とも一致するものである(マタイ27・15ほか参照)。**

18〜19 **その男を殺せ。バラバを釈放しろ** マタイ27・16ではその名を「バラバ・イエス」と記す(新共同訳、聖書協会共同訳、新改訳2017)。当時、イエスはあるふれた名であった(コロサイ4・11参照)。過越の恩赦は

バラバ・イエスとナザレのイエスの「二人のイエス」からの二者択一だったことになる。バラバは、都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入れられていた者であった。バラバはローマに対して暴動を起こした者であり、ゆえに愛国の士としてユダヤ民族から人気があったのである。

20 ピラトはイエスを釈放しようと思って、ピラトはこの場面でイエスをゆるすことについて3回も言及している(16、20、22)。しかし民衆はその都度それを拒み、イエスの処刑を要求した。

21 十字架だ。十字架につける 民衆はバラバの解放を求めるだけでなく、イエスの死刑、しかも最も恐ろしい十字架刑を要求した(申命記21・23参照)。

22 ピラトは彼らに三度目に言った： 3度目の提案は、1度目(14〜16)とほぼ同じである。2度目(20)もおそらく同じであろう。

23 けれども、彼らはイエスを十字架につけるように、しつこく大声で要求し続けた 指導者たちによるイエスについての虚説により、民は間違った方向に導かれた。そして、その声がいよいよ強くなっていった 「わたし

が毎日、宮で一緒にいる間、あなたがたはわたしに手をかけませんでした。しかし、今はあなたがたの時、暗闇の力です」(22・53)とあるように、闇の力がはびこる時が訪れたのである。

24〜25 それでピラトは、彼らの要求どおりすることに決めた。ピラトは明らかに、イエスが無実であると確信していた。もし彼の優先順位が正義に基づくものであったならば、ローマ総督としての権力を有する彼が、ユダヤの指導者層の要求や群衆の圧力に抵抗することに困難を感じることはなかったであろう。しかし彼の優先順位は実際的であった。すなわち、任地で暴動が起こることは、地方総督にとっては経歴に傷がつくことであり、なんとしても避けねばならないことであった。それゆえ彼は正義を曲げてしまったのである。他方イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた 公正なさばきをするべき総督が、群衆の要求に屈し、正義を曲げた点において、彼もまた責任を免れることはできないと言えよう。

参考図書 注解書 *Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word)*, 榎原康夫(新聖書注解)。その他 *The IVP Bible Background Commentary: NT*

牧羊ひろば



岡谷教会 教会学校

●はじめに

岡谷教会は、一九二七年に救われた一人の女性に端を発し起こされた群れで、教会としての歴史は一九四九（S20）年以降です。二〇二一年現在、創立72年目となります。

CSについての最も古い記録は一九五一年（はこぶね学校）ですが、当初より、信徒の各家庭が開放され、集会やCS分校に用いられてきた歴史を見ることができます。（参・記念誌「岡谷教会四十年の歩み」）

二〇一三年に新会堂が備えられたからは、教会内のみでの活動だと伺っております。

二〇一七年（田中師赴任）以降の記録の中から、CSについての活動や恵みをご報告します。

●CS礼拝スタイル・大人といっしょに

二〇一七年当初は1階「いのりの部屋」に於いて、朝9時半より30分のCS活動でした。しかし、その集まりはまばらで、時間通りに訪ねてくる子どもは少なかつた（0〜3名）ことを受け、CS教師会で「子どもにも変わることを求めるのではなく、大人が子どもにも合わせて柔軟に変化するべき」と話し合いがもたれたように記憶しています。そこで、大人の礼拝の中にCSメッセージを組



礼拝の中で「子どものお話」

み込み、その後分級に送り出し、頌栄の頃に再合流するスタイルへ変更しました。（この変更に至るまでには、CS教師内での話し合いやCSの在り方についての講演会などの経過を経、教会内での皆さんのご理解を得たり、第一礼拝、第三礼拝を設けたりする必要がありました。）



分級の様子

1年ほどかかって子どもは定着するようになり、結果的には良かったと思います。

現在のCSのレギュラーメンバーは、信徒の子女7名

ですが、コロナ下でオンライン組と会堂組に分かれている現状です。また、声掛けの上手な信徒さんによる外部からの出席も数名あったのですが、コロナ下で出席できない課題を残しています。

CS教師は、CSに重荷を覚えてくださる信徒4名と牧師夫人、CS教師をまとめてくださる校長に牧師が就いての構成です。非常態勢になってからは、牧師夫人か、もう一人のCS教師が礼拝後に短く分級を持っている状況です。



サマースクール

●年中行事・CSお楽しみ会について

各行事（進級進学式、イースター、合同キャンプ、サマースクール、CS祝福式、クリスマス）は各教会に準ずると思いますが、その他のものとして「CSお楽しみ会」なる行事が以前より取り入れられています（二〇二〇年以降コロナ下で開催できず）。不定期開催です。

内容は様々ですが、分級の時間を使って散歩をしたり、日曜午後にお弁当を持って諏訪湖周辺の公園などへ出かけたり、室内でおやつや、特別なランチをCS教師と一緒に作ります。

CSの働きは聖書の教えを子どもに詰め込むことに徹しがちですが、子どもの特性を踏まえてもう少し「お楽しみ」の部分が必要ではないかと、私共は考えております。



お楽しみ会 お弁当持って公園へ

「教会に来ると楽しいことがある」と子どもが記憶できると、教会生活も明るくなるように思います。お楽しみ会が子どもにとっての「教会での楽しい思い出作り、リフレッシュ」になってくれることを願っています。礼拝スタイル変更後にいただいた、いくつかの恵みをシェアさせていただきます。

●大人の中で成長する子ども〜子どもは聞いている〜

毎週父親といっしょに礼拝に来てくれる、現在5歳と3歳の兄妹がいます。去年あたりから妹さんのほうが、礼拝中祈られる「主の祈り」をとるところ、自然と口にするようになり、この1年の間に、とうとう「主の祈り」ばかりか「使徒信条」もほとんど言えるようになってしまいました。つられてお兄ちゃんも覚え、二人のかわいらしい、けれども力強いお祈りが、教会員を励ましてくれています。

たった週一回、わずか2〜3歳の子どもでも、これほど聞いたまますを吸収し身に着けていくのですから、大人たちの子どもに対するふるまい、その責任の大きさを考えさせられます。

●とくべつなおいのり

岡谷教会ではここ数年、礼拝の最後の祝祷のあと、牧師が講壇を降り、子ども一人ひとりの頭の上に手を置いて、その子どもの祝福を祈るようになりました。大変ほんわかとしたシーンで、大人もにっこりと見守っております。

どの幼児も、自分のための「とくべつなおいのり」が大好きなようで、頭に置かれた手に、自分の小さな手を



みんなお祈り

重ねてみたり、あるときは「せんせいだいすき」と小さな声で囁いてくれたりするそうです。

この特別なシーンがあることで、頌栄の奏楽が流れるときにはきちんと前に整列することはもちろん、おおきな声でいっしょに歌ったりすることも自然と覚えてくれました。

CSの形を変えてみなければ、こういう成長には出会えなかったかもしれません。

一歩前に踏み出したわたしたちに、神様がプレゼントしてくださった祝福の一つとして受け止めています。



とくべつなおいのり

●まほうの言葉かけ

筆者は以前、肌や髪がほかのお友達とちがうことを悩む少女にアドバイスした経験から、大人が子どもに対して使う言葉かけのたいせつさを考えさせられています。背景のちがう子どもにあった、背中を押してくれることば、やる気や勇気がでてくることばを見つけられたら、教会に自分の存在意義を覚えてくれるようになることを、示されています。

まだ「奉仕」ということばを理解できていない子どもでも、大人たちの中で「お手伝い」に目覚めることはよくあるかと思えます。

朝、テレビで戦隊ものを視聴してから教会に来た男子は正義感に燃えていることも多く、「ミッション」「ミッションコンプリート」が大好きです。最近では「今日のミッションはなに？」と聞いてくれることも増えました。オンラインで礼拝に参加する近所のおともだちに届けた物をしてくれたり、礼拝の献金係をしたり、掃除機をかけてくれたりと、小学校1年生から、ものすごいヒーローです。

彼らが喜びながら教会に仕えることを覚えつつ、成長

していつてくれたら嬉しいです。

子どもが普段から親しんでいる言葉や文化を、大人が拾ってあげることで、子どもが自信をつけながら成長できるひとつのきっかけになることを、CSに関わる中で教えていただきました。

●おわりに

昨今のウイルス感染症に伴い、教会学校運営も難しい中ではありますが、これからも子どもたちが教会の中で、神様に愛されている特別な一人一人として成長できるように、取り組んでいきたいと願っています。

(田中愛子)



ミッション進行中

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<https://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

おわりに

『牧羊者』二〇二二年度IV巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。

巻頭言は歌垣教会の加藤清師が執筆してくださいました。教師養成講座は二〇〇六年度II巻に掲載された鎌野直人師の原稿を一部編集して再掲させていただきました。「牧羊ひろば」では岡谷教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

メッセージ例

聖書講解

研究資料

ワーク(A)

(B)

(C)

中高科へのヒント
子ども聖書日課
フラッシュカード

み言葉カード・イラスト

ワープロ打ち込み
校 正

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

後藤 真師 飯田勝彦師 土屋開夫師

櫻井めぐみ師 和田牧子師

小泉 創師 石田高保師 宮澤清志師

大頭真一師 福井文彦師 加藤郁生師

高橋頼男師 中島啓一師

金井由嗣師 中澤清志師 小平德行師

木村勝志師 中島啓一師 鎌野 幸師

宇野真佑美師 吉田美穂師 竹崎光則師

石川剛土師 勝田幸恵師 上森恭子師

野勢かほる師 田中裕明師

八幡直人師 石田高保師

後藤健一師 小野淳子師 金田ゆり師

田中愛子師 後藤栄子師 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 後藤栄子師 丹羽 遥姉

柴田福音師 松浦あん姉 後藤栄子師 丹羽 遥姉

多田豊子師 中島啓一師

後藤健一師

聖書教育教案誌 牧羊者 二〇二二年度 IV巻

二〇二二年一月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三-3-19

電話 (078) 575-5511

FAX (078) 575-1661

印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 576-1396

* 聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会 許諾番号 4-2-1750号